

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

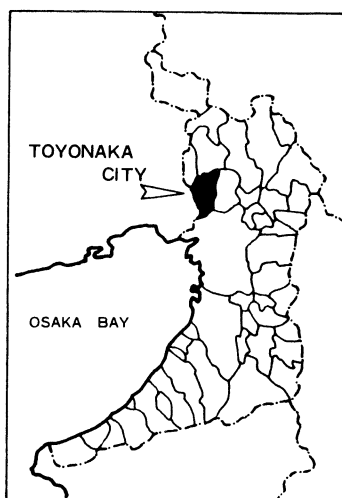
1989年度

1990年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1989年度



1990年3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、大阪のベッドタウンとして、戦後、急速に成長してきた町であります。

本市は緑なす千里丘陵と猪名川によって育まれた沃野にあり、安定した生産基盤と自然に恵まれて栄えた悠久の地であります。

しかし、近年にみる開発はとどまるところなく、一層激しく、土地を、景観を、変貌させています。

開発と保護、これは古くて新しい問題であります。私達は先人の文化遺産を謙虚に受けとめ、十分に認識し、現代の社会に活かしていかなければなりません。

この報告書は、以上のようなことを踏まえ、開発に伴って危機に直面している遺跡について、国並びに大阪府の援助を受けて実施した調査の概要報告であります。これらの調査で得られたものは微々たるものですが、この作業を繰返すことにより点が面となり、先人のくらしぶりが明らかにされ、現代社会に活かされる日がくることを確信しています。

なお、調査にあたっては、多くの御指導をいただいた諸先生をはじめ、土地所有者の方々には文化財の重要性を御理解いただき、積極的に御協力いただきました。また文化庁、大阪府教育委員会並びに関係機関には格別の御指導と御協力をいただきました。こうした関係各位からの御協力に支えられて、文化財行政がより一層押し進められることに対し、関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

平成 2 年 3 月 31 日

豊中市教育委員会

教育長 青 木 伊 織

例 言

1. 本書は豊中市教育委員会が平成元年度国庫補助事業(総額4,000,000円、国庫50%、府費25%)として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、穂積遺跡、新免遺跡、島田遺跡について実施した。平成元年6月17日～平成2年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行なった。
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育部教育課文化係が実施した。詳細は下表のごとくである。
4. 本書の執筆は、それぞれ下記の者が分担し、編集は担当者が行なった。

第I章、第IV章2の(3)	潮平ゆうこ
第II章	服部 聡志
第III章1、2の(1)、第IV章1、2の(1)(2)、第V章	柳本 照男
〃 2の(2)土器	清水 京子
〃 〃 石器	松木 武彦
5. 各調査地の土地所有者、施工業者、ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護に対して御理解をいただきました。深く感謝いたします。

遺 跡 名	調 査 地	調査面積	担当者	調 査 期 間
穂積遺跡 9次	豊中市服部西町3丁目105-102	77㎡	服部聡志	平成元年6月17日～7月13日
新免遺跡 28次	豊中市玉井町3丁目15-1	92㎡	柳本照男	平成元年12月6日～ 平成2年1月15日
島田遺跡 6次	豊中市庄内栄町2丁目48	656㎡	柳本照男	平成元年6月19日～11月23日
蛍池北遺跡14次	豊中市蛍池北町2丁目43-5,43-17	108㎡	柳本照男	平成元年12月11日～12月22日

目 次

第1章 位置と環境

第II章 穂積遺跡第9次調査の概要

- 1. 調査の経緯..... 3
- 2. 調査の概要
 - (1) 基本層序..... 3
 - (2) 検出した遺構・遺物..... 4

第III章 新免遺跡第28次調査の概要

- 1. 調査の経緯..... 7
- 2. 調査の概要
 - (1) 基本層序..... 7
 - (2) 検出した遺構・遺物..... 9

第VI章 島田遺跡第6次調査の概要

- 1. 調査の経緯.....19
- 2. 調査の概要
 - (1) 基本層序と地区設定.....19
 - (2) 検出遺構.....21
 - (3) 出土遺物.....25

第V章 蛍池北遺跡第14次調査の概要

- 1. 調査の経緯.....37
- 2. 調査の概要
 - (1) 検出した遺構・遺物.....38

図版目次

- 図版 1 穂積遺跡第 9 次調査地点
 - (1) 遺構検出状況（北より）
 - (2) 遺構完掘状況（北より）
- 図版 2 穂積遺跡第 9 次調査地点
 - (1) S K - 3 付近（東より）
 - (2) S K - 1（南西より）
- 図版 3 新免遺跡第 28 次調査地点
 - (1) 遺構検出状況（南側）
 - (2) 遺構検出状況（北側）
- 図版 4 新免遺跡第 28 次調査地点
 - (1) 遺構完掘状況（南側）
 - (2) 遺構完掘状況（北側）
- 図版 5 島田遺跡第 6 次調査地点
 - (1) 包含層上面検出状況（西側）
 - (2) 大溝検出状況
- 図版 6 島田遺跡第 6 次調査地点
 - (1) 遺構検出状況（全体、東から）
 - (2) 遺構検出状況（西側）
- 図版 7 島田遺跡第 6 次調査地点
 - (1) 井戸 2 検出状況
 - (2) 井戸 2 完掘状況
- 図版 8 島田遺跡第 6 次調査地点
 - (1) 井戸 2 外枠木組
 - (2) 井戸 2 井筒内部
- 図版 9 島田遺跡第 6 次調査地点
 - (1) 井戸 2 木組の状況（上部構造）
 - (2) 井戸 2 木組の状況（上部構造土台）
- 図版 10 島田遺跡第 6 次調査地点
 - (1) 井戸 2 木組と井筒（下部構造）

(2) 井戸 2 井筒

図版11 蛭池北遺跡第14次調査地点

(1) 遺構完掘状況（北から）

(2) 井戸完掘状況

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	調査地点位置図	3
第3図	調査範囲図	4
第4図	遺構平面図	5
第5図	出土遺物実測図	6
第6図	調査範囲図	7
第7図	調査地点位置図	7
第8図	S H - 1、S H - 2 平面図・断面図	8
第9図	S H - 5 平面図・断面図	9
第10図	S D - 3 平面図・断面図	10
第11図	土器溜り検出状況	10
第12図	出土遺物実測図	12
第13図	出土遺物実測図	14
第14図	出土石器実測図	16
第15図	出土石器実測図	17
第16図	遺構全体図	折込
第17図	試掘調査の状況	19
第18図	調査地点位置図	19
第19図	土層断面の状況	20
第20図	調査範囲図	20
第21図	大溝断面の状況	21
第22図	掘立柱建物 1 平面図・断面図	21
第23図	井戸 1 断面	22
第24図	井戸 2	22
第25図	井戸 2 甕出土状態	22

第26図	井戸 2 平面図・断面図	23
第27図	土坑46検出状況	24
第28図	落ち込み 2 断面	24
第29図	土坑27遺物出土状態	24
第30図	溝19遺物出土状態	25
第31図	大溝出土遺物	25
第32図	掘立柱建物 1 出土遺物	26
第33図	井戸 1 出土遺物	26
第34図	井戸 2 出土遺物	28
第35図	土坑46出土遺物	29
第36図	落ち込み 2 出土遺物	30
第37図	土坑27出土遺物	32
第38図	溝19出土遺物	34
第39図	土器群出土遺物	35
第40図	土器群出土状態	36
第41図	遺構全体図	折込
第42図	調査範囲図	37
第43図	調査地点位置図	37
第44図	遺溝平面図	38
第45図	井戸断面図	38
第46図	出土遺物実測図	39
第47図	S K - 2 断面	39

第I章 位置と環境

位置 豊中市は大阪の北部に位置し、西は兵庫県と境を接する。地理的には北東部の丘陵地及び台地と、西南部の沖積低地とに大きく区分される。千里丘陵を吹田市と二分する北東部には、大阪層群からなる最高位130mの島熊山と刀根山丘陵が、南流する千里川を介して対置する。中央部には中・低位段丘面によって形成される通称豊中台地がのび、これを囲んで西摂平野の東部に位置する沖積低地が西南に拡がる。

今回報告する調査地のうち蛍池北遺跡、新免遺跡はそれぞれ箕面川左岸、千里川左岸の低位段丘上に形成され、また島田遺跡及び穂積遺跡は猪名川左岸の平野部に分布するものである。

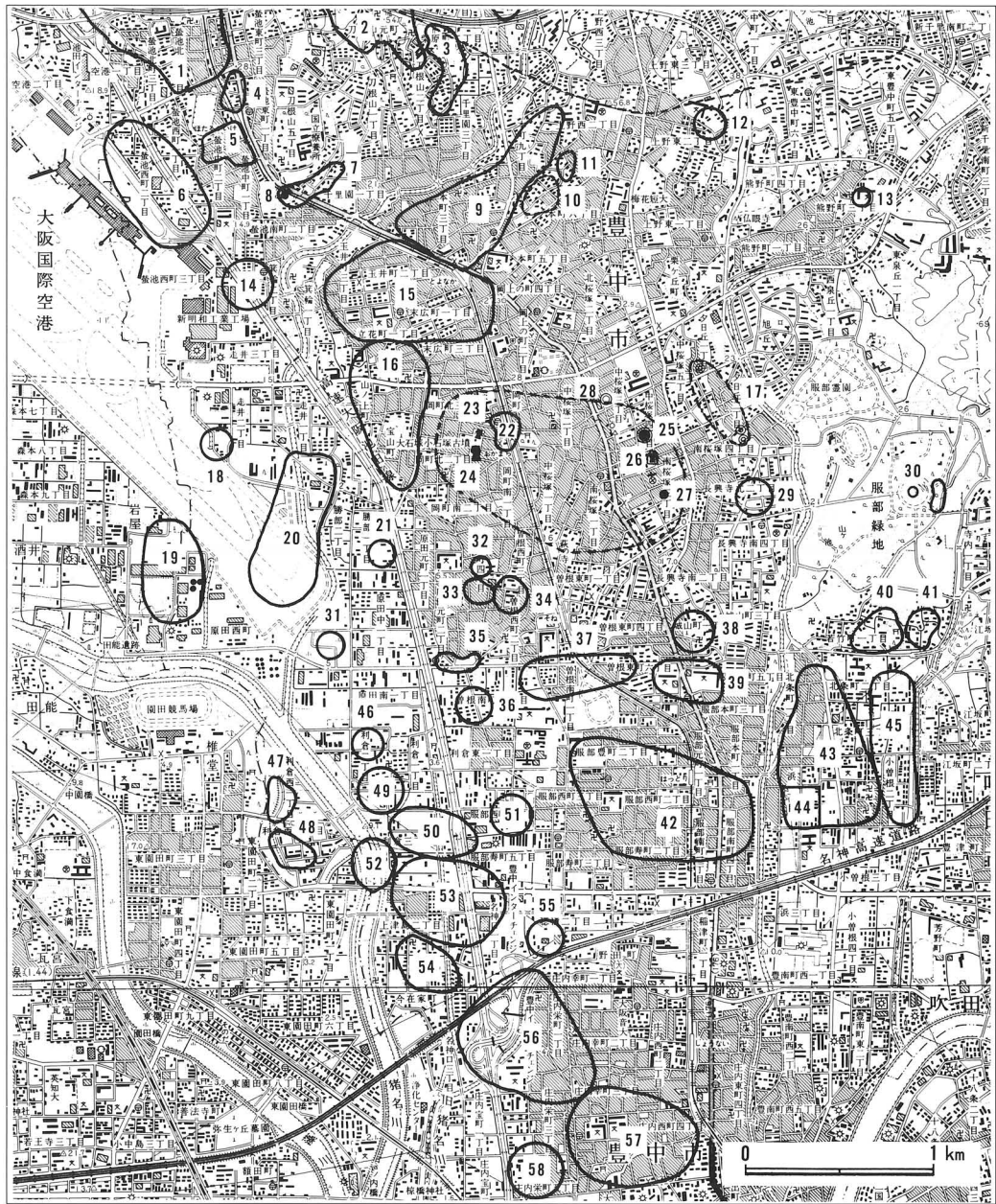
歴史的環境 豊中市域において旧石器時代に属する資料は、蛍池西遺跡、柴原遺跡等の市域北半部の低・中位段丘上にみいだされるが、いずれもナイフ形石器の単独出土に限られる。

縄文時代の主たる遺跡分布は千里川の河岸段丘上に位置し、早期から晩期にかけて点在する。なかでも野畑春日町遺跡や野畑遺跡など中期から晩期に中心をおく遺跡が主流である。

弥生時代に入ると、猪名川流域及び台地縁辺部に多くの集落が形成される。前期から後期にかけて継続するものとしては、勝部遺跡、小曾根遺跡が挙げられる。それぞれ千里川、天竺川流域の低地に立地している。中期に形成されたとみられる蛍池北遺跡、新免遺跡は、近年の宅地再開発に伴う緊急発掘調査の増加により、その概要を明らかにしつつある。後期には利倉西遺跡、上津島遺跡、穂積遺跡、庄内遺跡などが市域南半の平野部に展開する。

古墳時代の集落は、ほぼ弥生時代に既存した居住地を踏襲する。前、中期の主要な集落地は平野部においてみられるが、後期には桜井谷の支谷を利用した須恵器生産の隆盛に伴って千里川流域の柴原遺跡、本町遺跡、新免遺跡が生産体制の一翼を担う存在としてクローズアップされる。一方、市内の古墳は前期古墳の待兼山古墳、御神山古墳が丘陵上に、中期の桜塚古墳群が台地上に築造されている。後期には丘陵尾根部に太鼓塚古墳群、新免宮山古墳群が形成されているが、近年、台地及び平野部において古墳周濠の検出が相次いでおり、古墳分布の再検討がなされつつある。

飛鳥後期から奈良時代にかけては金寺山廃寺とその関連がうかがえる本町遺跡、旧山陽道に近接する蛍池北遺跡、猪名川下流域の上津島南遺跡、島田遺跡などが有力氏族もしくは官衙的な色彩をもって展開する。平安時代末期から鎌倉時代に入ると、新たに中世村落の形成がみられ、榎坂郷に属する小曾根遺跡、穂積遺跡の内容は中世文書との関連が重視されよう。



- | | | | | | |
|------------------------|-------------|------------|------------|------------|--------------|
| 1. 蛍池北遺跡
(池田市宮ノ前遺跡) | 10. 新免宮山古墳群 | 20. 勝部遺跡 | 30. 梅塚古墳 | 40. 若竹町遺跡 | 50. 利倉南遺跡 |
| 2. 待兼山遺跡 | 11. 金寺山廃寺 | 21. 勝部東遺跡 | 31. 原田中町遺跡 | 41. 寺内遺跡 | 51. 服部西遺跡 |
| 3. 柴原遺跡 | 12. 上野遺跡 | 22. 岡町北遺跡 | 32. 原田城跡 | 42. 穂積遺跡 | 52. 上津島川床遺跡 |
| 4. 蛍池東遺跡 | 13. 熊野町遺跡 | 23. 小石塚古墳 | 33. 原田遺跡 | 43. 小曾根遺跡 | 53. 上津島遺跡 |
| 5. 麻田藩陣屋跡 | 14. 箕輪遺跡 | 24. 大石塚古墳 | 34. 曾根遺跡 | 44. 今西氏屋敷 | 54. 上津島南遺跡 |
| 6. 蛍池西遺跡 | 15. 新免遺跡 | 25. 大塚古墳 | 35. 原田元町遺跡 | 45. 北条遺跡 | 55. 穂積ポンプ場遺跡 |
| 7. 南刀根山遺跡 | 16. 山ノ上遺跡 | 26. 御獅子塚古墳 | 36. 曾根南遺跡 | 46. 利倉北遺跡 | 56. 島田遺跡 |
| 8. 御神山古墳 | 17. 下原窯跡群 | 27. 南天平塚古墳 | 37. 豊島北遺跡 | 47. 権堂の前遺跡 | 57. 庄内遺跡 |
| 9. 本町遺跡 | 18. 走井遺跡 | 28. 桜塚古墳群 | 38. 城山遺跡 | 48. 利倉西遺跡 | 58. 島江遺跡 |
| | 19. 原田西遺跡 | 29. 長興寺遺跡 | 39. 服部遺跡 | 49. 利倉遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図

第II章 穂積遺跡第9次調査の概要

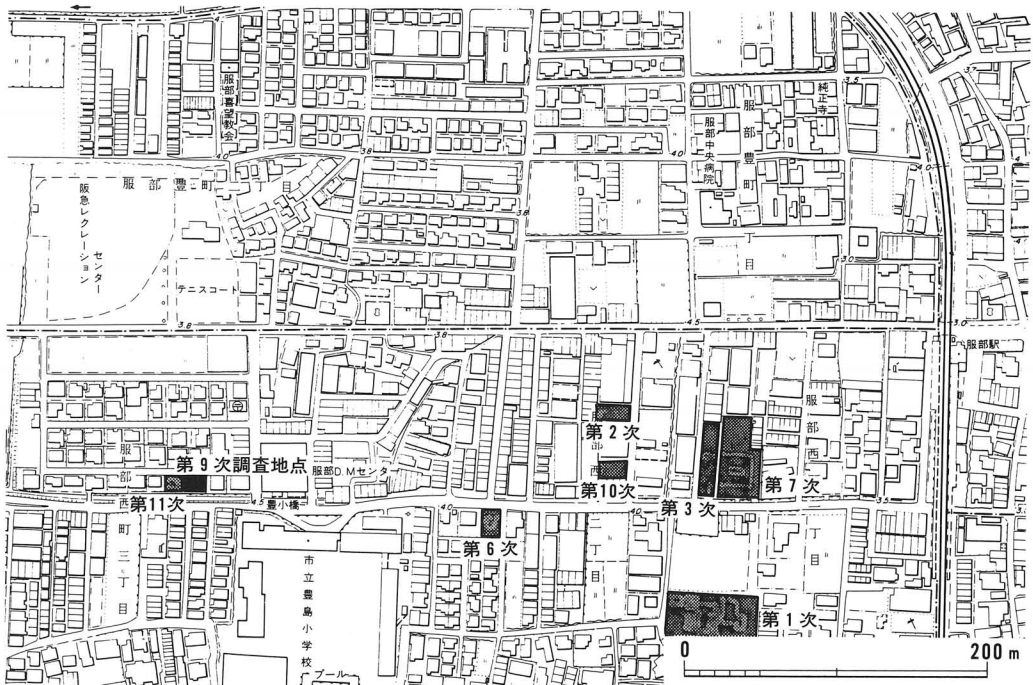
1. 調査の経緯

調査地点は豊中市服部西町3丁目105番102号に所在する。地下倉庫付共同住宅の建築申請にもとづき、建築予定面積の全域約77m²を対象に実施したものである。調査は1989年6月17日～7月13日の約1ヶ月間を費やして行った。

2. 調査の概要

(1) 基本層序

調査地点南側は現在、東西方向に走る道路敷となっているが、これはかつての穂積村を水害から守るために設けられた^{かこいづみ}囲堤の北辺に相当するものである。この囲堤の北側一帯は、昭和に入り大規模な整地作業が行われたようで、現地表面より約1.2mの深さまで厚い盛土層で覆われている。したがって、この盛土層の下が昭和初期までの旧地表面であり、厚さ約20cmの耕作土（緑灰色シルト層）が置かれている。旧耕土の下には中世の遺物を少量含む灰色粘土層（第4



第2図 調査地点位置図 (1 : 5000)

図1～3)が約30cmの厚さで堆積し、その下に弥生～古墳時代の遺物を多量に含む暗灰色粘土層(4)、褐灰色粘質土(5)があり、黄色砂混粘土層を主体とした地山層に達する。検出された遺構は、地山上面もしくは褐灰色粘質土(5)の上面から掘り込まれたものである。なお最終遺構面(地山上面)の標高は海拔2.00mである。

(2) 検出した遺構・遺物

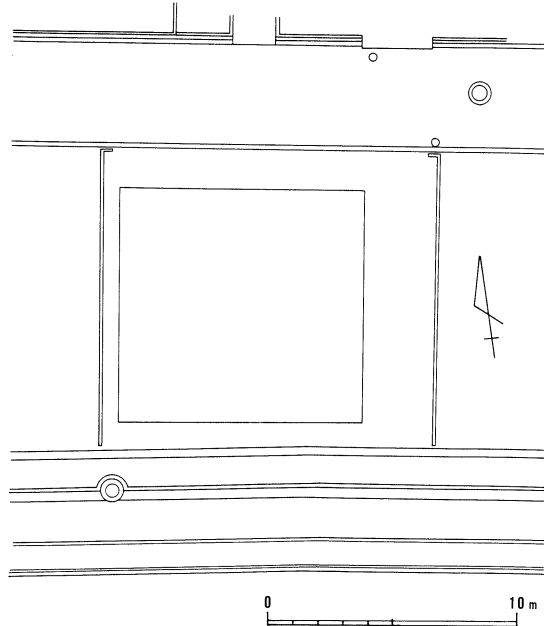
検出した遺構として、掘立柱建物跡1、土坑4、井戸1、溝6、ピット12がある。遺構の時期は概ね弥生時代後期と古墳時代中期に限定できるが、土坑1など少数の古墳時代に属するものを除くと、大半が弥生時代後期に営まれたものと考えられる。

以下、検出した主な遺構について記す。

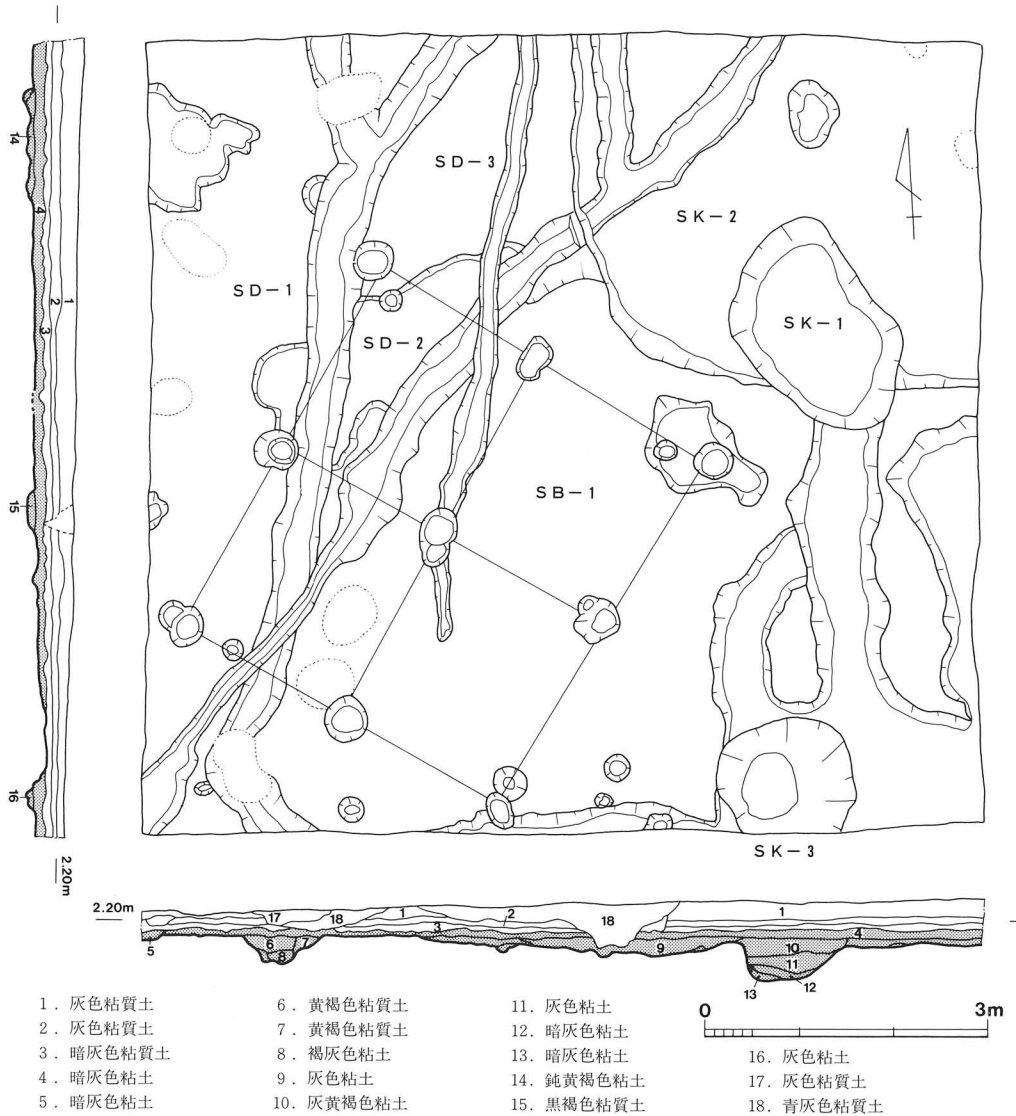
SB-1 (掘立柱建物跡) 東西2間(4.0m)、南北2間(4.3m)の総柱建物である。柱穴は直径30～45cm、深さ34～43cm、軸方位はN-33°-Eである。柱穴埋土から出土した少量の遺物から弥生時代後期に営まれたものである可能性が高い。

SK-1 長径2.3m、短径1.46m、深さ約17cmの不定形土坑である。埋土は3層に区分でき、いずれも黒色粘土を主体とするが、このうち上層と中層の間に薄い炭化物の層をはさむ。遺物の多くはこの炭化物層より下の層から出土した。

出土した遺物として土師器の甕、須恵器の甕、高杯などの破片がある(第5図)。5は土師器の甕で、口径21.7cmを計る。口縁部は短く外反し、やや肥厚した端面に強い回転ナデを施すことによりシャープに仕上げている。体部外面には、やや鈍いが粗いカキ目調整ともみられるハケ痕が残り、明らかに回転を利用した調整であることを窺わせる。内面は斜め方向に明瞭な指頭痕を残す。口縁端部の形状や外面調整の手法などから、須恵器製作の技術を取り入れたものであることを推定させる。6も土師器の甕で、口縁径14.0cm。口縁部中位よりやや下に段及び突帯を有する。磨滅が著しく器表面の調整は不明。7は須恵器の高杯脚部である。底径10.8cm、脚高5.5cm。大きく広がる脚外面に断面三角形のシャープな突帯が巡る。スカシ孔はなし。胎土は緻密で、内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施される。所謂初期須恵器の範疇に属するものである。以上の遺物より、当遺構は古墳時代中期に営まれたものと考えられる。



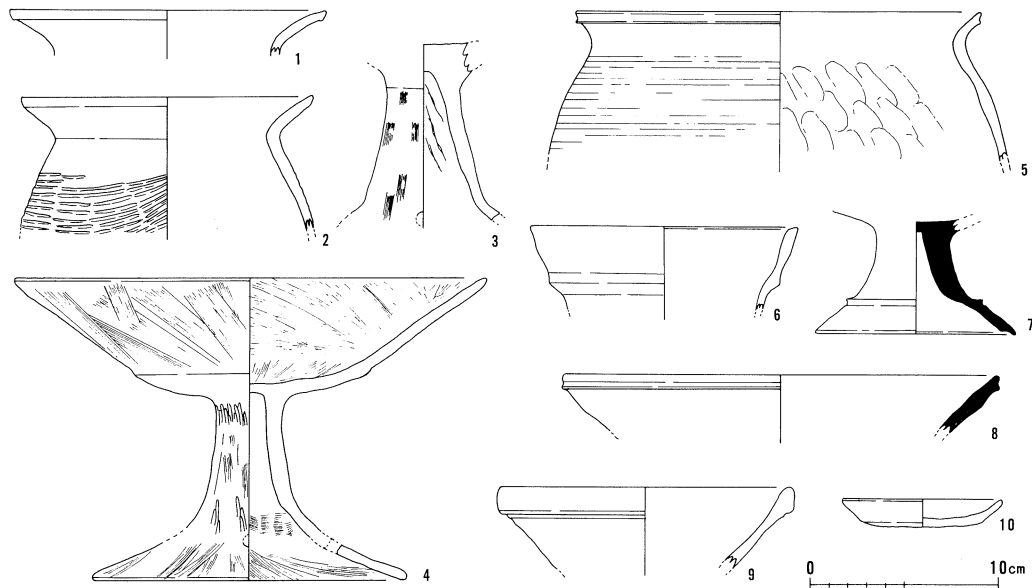
第3図 調査範囲図(1:300)



第4図 遺構平面図 (1:80)

SK-2 調査区北東部にて検出した土坑で、全体の規模、形状は不明。ただし西側と南側のラインが直線的であるところから隅丸形状を呈する可能性が高い。深さは約20cmで、肩部は比較的急角度に落ち、底面はほぼ平坦に掘り込まれている。規模、形状から住居跡の可能性も考えられたが、支柱穴、壁溝の存在を確認することはできなかった。弥生時代後期に属するものと考えられる。

SK-3 素掘りの井戸とみられる土坑で、直径約1.5m、深さ64cm。埋土は4層に区分され、うち上2層は地山の黄褐色粘土を含む埋め戻し土とみられる。第3層上面より弥生時代後期後半の特徴を備えた遺物がややまとまって出土した。



第5図 出土遺物実測図(1:4)

出土遺物として甕、高杯等がある(第5図1~4)。1は甕の口縁部で、口径16.8cm。2も甕で、口径15.4cm、残存高7.0cm。く字状に外反する口縁部を有し、体部上半に比較的粗いタキを平行もしくは若干右上がりに施す。体部最大径は口縁部径をやや稜賀する。3は高杯の脚柱部で、残存高9.4cm。ほぼ直線的に広がる脚柱部より、裾部が大きく屈曲してひろくものとみられる。外面は細かいハケ調整のちなデ。内面は斜めにシボリ痕が観察される。スカシ孔は3もしくは4方向。4は脚の一部を欠失する他はほぼ完形を保つ高杯である。杯部径25.0cm、底径16.6cm、器高約16.0cm。ほぼ水平にのびる杯底部より大きく直線的に広がる口縁部を有し、その間に鈍い稜を形づくる。脚部はやや急角度で下り、中程から大きく屈曲してひろく。スカシ孔は3もしくは4方とみられる。調整は器面のほぼ全体を細かいハケ調整によるが、脚柱部にはさらに縦方向のヘラミガキが施される。

SD-1・2・3 南北よりやや東側に傾く方位で走る3本の溝である。SD-1・SD-2は幅50cm前後、深さ10~20cmで、いずれも北側で二又に分かれる。SD-3は幅20cm前後、深さ8cm。3本の溝はそれぞれ重複関係にあり、SD-1→2→3の順に順次埋まりながら掘り込まれたものと考えられる。いずれも弥生時代後期に属する。

その他の出土遺物(第5図8~10) 8は地山直上の包含層から出土した須恵器の壺口縁部破片である。推定口径22.8cm。口縁端部下位にシャープな突帯が巡る。初期須恵器の特徴を有するものである。9は白磁の碗で、第3層から出土した。推定口径15.4cm。口縁端部は幅の広い、やや鈍重な玉縁をつくる。10は第1層出土の瓦器小皿である。口径8.6cm、器高1.4cm。底部内外面ともにナデ、口縁部は丁寧なヨコナデが施される。

第三章 新免遺跡第28次調査の概要

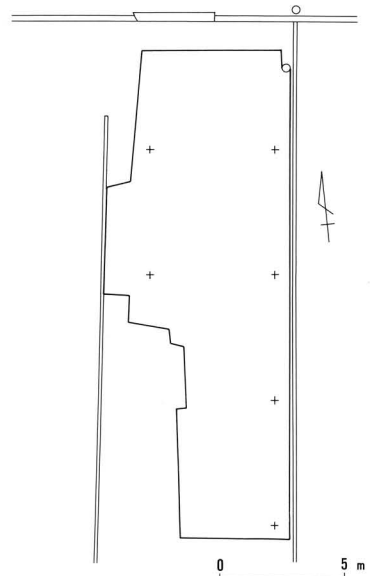
1. 調査の経緯

調査地点は、豊中市玉井町3丁目15-1に所在する。個人住宅の建築申請にもとづき、建築範囲約92m²を対象に実施した。

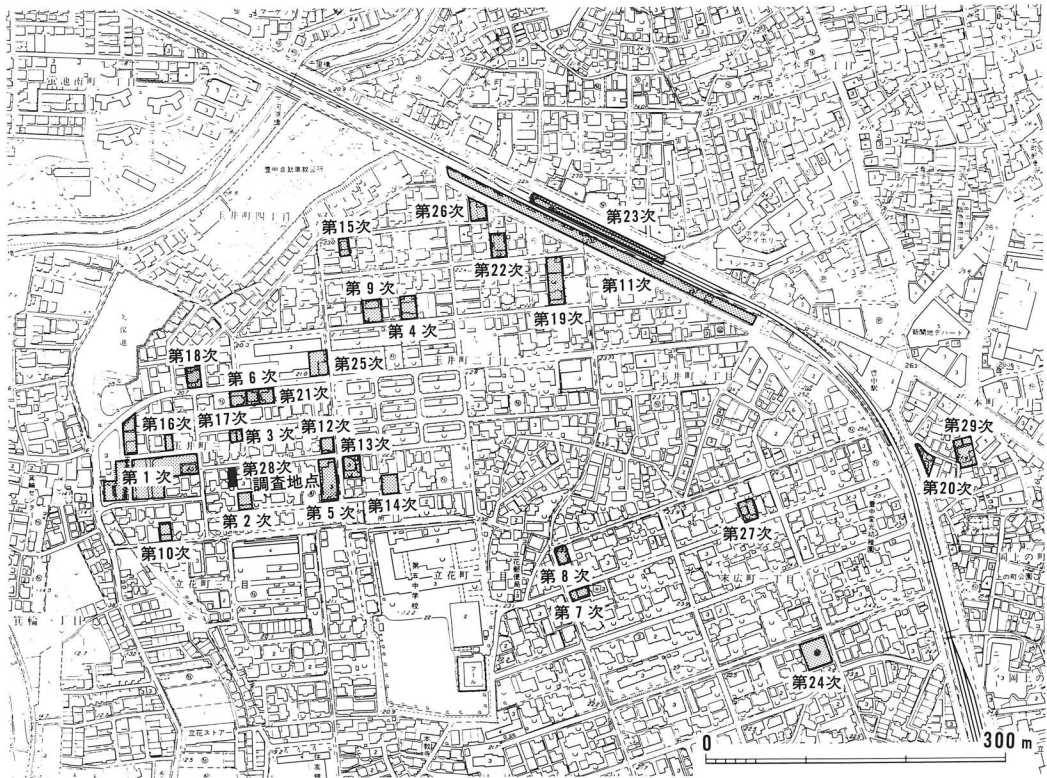
2. 調査の概要

(1) 基本層序

この地域一帯は、通称豊中台地と呼ばれ、低位段丘で形成されている。したがって遺構面までも浅く20~40cmの深さで遺構面に達してしまう。大正2年に箕面有馬電車（現在の阪急宝塚線）豊中駅の新設にもなつて開発された住宅地であ



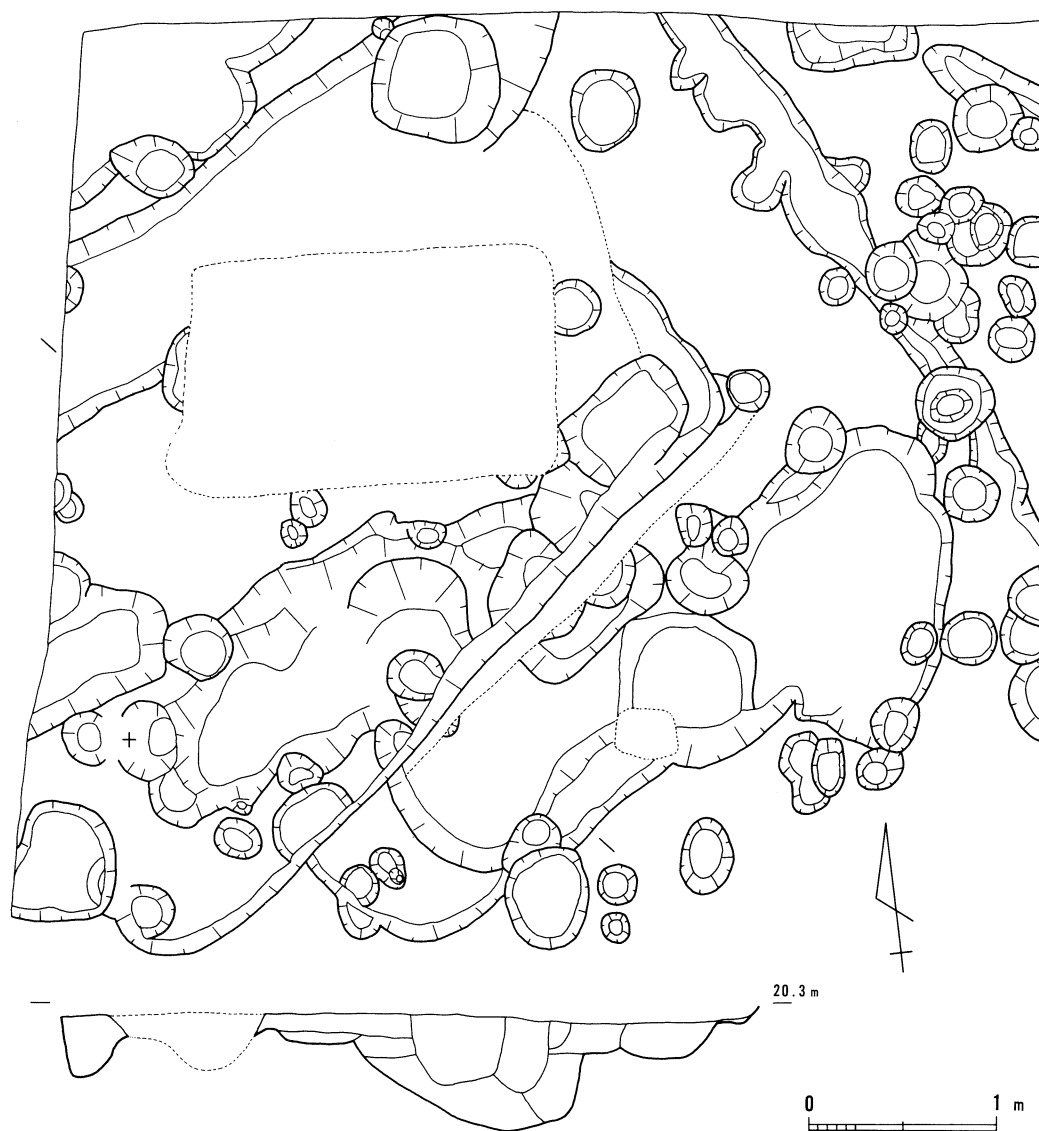
第6図 調査範囲図



第7図 調査地点位置図

り、それ以前は畑地として使用され、土層もこのような状況が観察される。

今回の調査地において第1層は宅地に伴う盛土であり、その盛土も大正以後の住宅建替にもなっていくつかの整地層がみられる。また太平洋戦争時の焼土の整地層もみられる。これらの層が地表からおおよそ30cmまで及んでいるがそのほかにも建物等の基礎により地山をも深く掘られ、包含層や遺構も多く消滅している。したがって遺跡の残存状態としては決して良好な状況ではなかった。



第8図 SH-1、SH-2 平面図・断面図

第2層は耕作土の下層にあたるのであろうか灰色の砂質土が約10cm堆積し、新旧の遺物が含まれている。第3層は茶褐色の砂質土で約10cmの堆積があり、中世遺物までを含む層である。第4層は褐色の粘質土で須恵器・弥生土器を包含する。遺構は第4層上面から切り込んだものも多くみられるが検出面と同色のため、みきわめられなかった。

(2) 検出した遺構、遺物

イ. 検出遺構 検出した遺構は竪穴式住居、溝、土壇、柱穴等であるが、これらの遺構が調査全域にわたって重なり合っているため、複雑な状況を示している。その中でも柱穴は非常に多く、調査地の幅の狭さもあって現状では正確な建物を抽出することは困難な状況である。したがって今回は明確な遺構の概略のみを報告するものとする。

SH-1・SH-2(第8図)

調査区北側、A-1・B-1～A-2・B-2地区にかけて検出した方形プランの竪穴住居跡である。遺構の重複関係が密で完存しているものはない。SH-1は北側のSD-5等により切られ、SH-2はSH-1により大半を失っている。確認できた範囲内で規模を記述しておく、SH-1は一辺約4.3mで現存する深さは5cm～15cmである。SH-2は東西一辺約4.4m、東側の南北一辺約3m以上である。周溝が東壁付近で検出され、幅約20cm、深さ5cmである。これ



第9図 SH-5 平面図・断面図

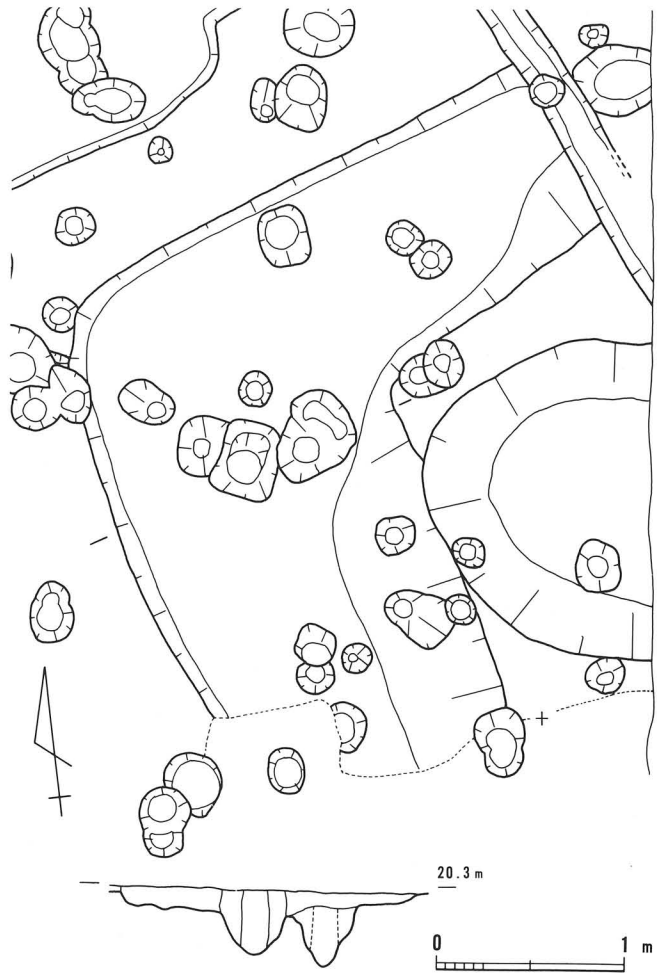
らの住居跡中にあるSK-10、SK-11付近で滑石製の白玉が出土しているが、どの遺構に伴うものなのか明確にすることができない。

SH-5 (第9図)

調査区のほぼ中央西側で検出した方形プランの住居跡で西半が欠いている。規模は一辺約4.4mで周囲に幅30cm、深さ4cmの溝をめぐらしている。主柱は4本になるとみられ、そのうち東側の2本が位置と深さなどから推定できる。

周溝状遺構 (SD-3)

溝と判断されるものはいくつか検出されているが、その中でも幅が広く、他の溝とは性格を異にするとみられるSD-3をとりあげておく。この溝は調査の中央東側で方形にあたるIコーナー部分のみを検出したもので、北側と西側部分では幅を若干異にする。西側部分では幅約1.5m、深さ約15cmである。周溝内から土師器、須恵器が出土することから方墳の周溝の可能性が高い。



第10図 SD-3 平面図・断面図

土器溜り (第11図)

調査区の南側で検出したものである。廃棄土坑とみられるもので、多種の破損した土器が浅く掘られた凹み状の中で重なって出土している。その下層には弥生時代中期の土坑が認められた。

柱穴群

わずかな調査範囲にもかかわらず多数の柱穴を検出した。時期は弥生時代中期のものから奈



第11図 土器溜り検出状況

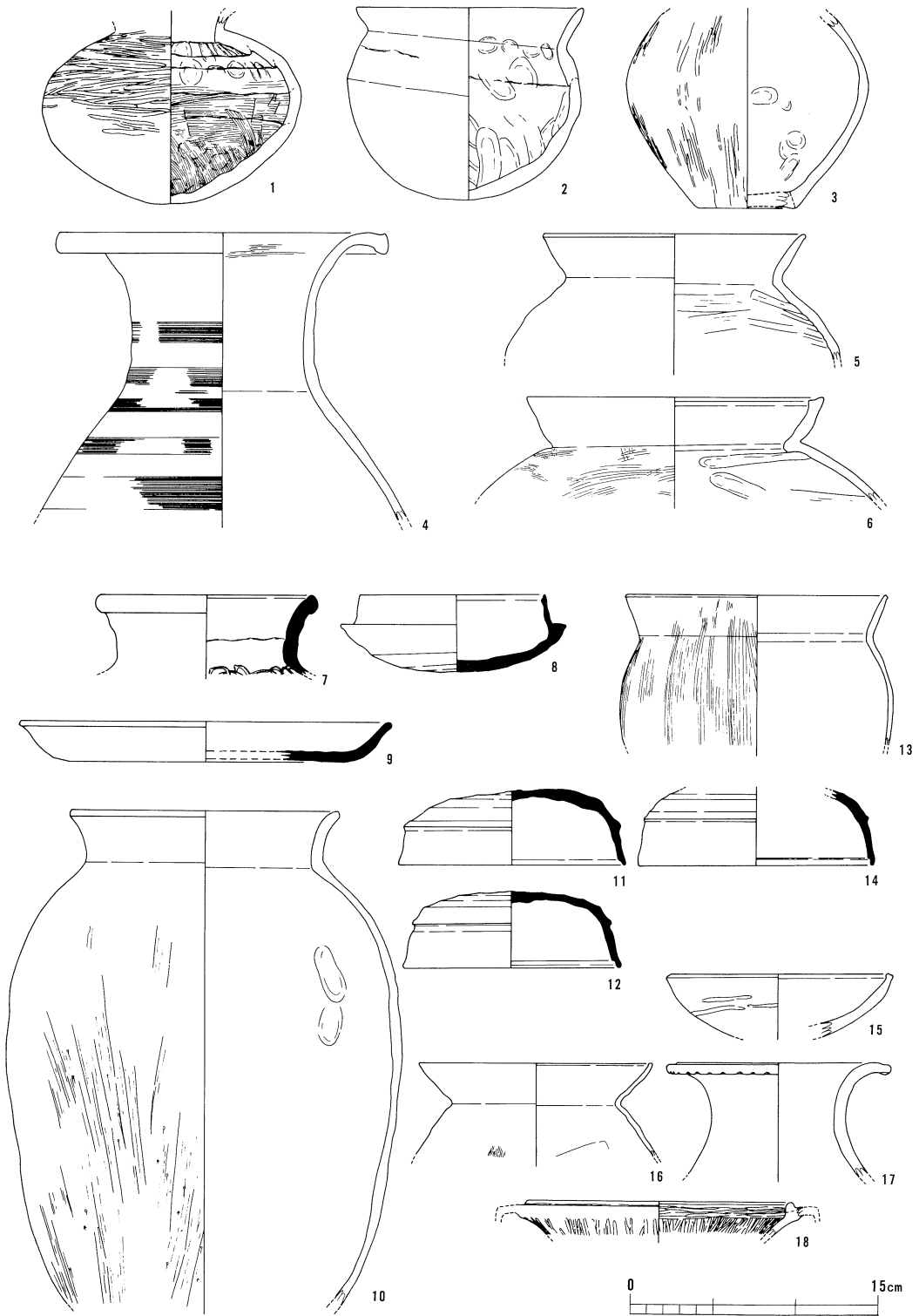
良時代におよぶものであるが、中でも弥生時代中期と古墳時代中期～後期の遺構が大半を占める。またほとんどの柱穴が2回～3回の切り合いが認められることから早急に結論はだせない状況にある。しかし平面図を確認すると、現状である程度建物の向きの傾向がでそうである。調査区中央部分のA-2からB-2地区では北西方向から南東方向に柱穴群が2列並び、それと直行方向に1列あることが認められる。柱間ほどの柱穴でも通りそうであるので、詳細な検討を行った後、報告したい。

ロ. 出土遺物

土器 (第12図、第13図)

土壌、住居跡、柱穴などから出土したものをとりあげる。

第12図-1は、SK-2より出土した小型壺の体部である。外面の色調は淡黄土色を呈し、胎土も緻密で、焼成も良好である。外面体部上半部は丁寧なヘラミガキが施され下半部はヨコ方向にナデている。内面は指で強く押さえナデた後、下半部にのみハケを施す。2はSD-3から出土したほぼ完形の小型甕。体部器高の2/3あたりで少し張り気味の腹部を有し丸底の底部へと続く。外面の調整は不明、内面は指で押さえナデている。3はSP-119からの出土で、平底の壺体部で、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はナデ。体部の片側半分が残っているが、その残存部の大部分が黒斑でおおわれている。4はA-2地区、地山上面で出土したもので、口径19.5cmの弥生時代中期の広口壺である。頸部に楕円直線文が施されているが、条線が細かすぎるため、条数は不明である。原体幅も様々であるが、1.2cm幅のものが1つ認められる。5はSD-3から出土した甕の上半部である。頸部で外斜上方に屈折し、端部は丸くおわる。体部上半外面は風化が著しく、調整は不明である。内面は頸部より若干下がったところに左斜め上方の向きに篋削り痕が認められる。6も同じくSD-3から出土したもので、口径18.4cmで器壁も厚めの甕である。口縁端部は面をなし、内側にやや肥厚する。体部外面はタテハケの上からヨコ方向のハケを行い、体部内面は口縁直下を指で強くナデて一巡し、それ以下はナデとケズリの痕跡がわずかに残るが詳細は不明である。7はSK-8から出土している。須恵器の甕の口縁で口径は13.4cm。口縁内面に接合痕が見られ、口縁以下は青海波タタキが施される。SH-2から出土した8は、須恵器の杯身で底部に1本線のヘラ記号を有する。口径が11.0cmで、立ちあがりは少し内側へ垂直にのび、端部は段を有すが丸味を帯び、内面底部に仕上げナデを施す。回転ヘラケズリは天井部の2/3に及ばず鋭さに欠ける。9はSK-9から出土した須恵器の盤で口径は22cm、全体に回転ナデが施される。胎土も密で焼成も良好である。10はSK-9から出土した。土師器の長胴化した甕で、胎土は粗く7mm大の砂粒も少量含む。外面は下から上へ板ナデを行い、砂粒も少し動いている。内面は一部に指ナデの痕跡が認められるが、剝離のため詳細は不明である。11・12は須恵器の杯蓋でSH-2から出土している。口径13.6cm

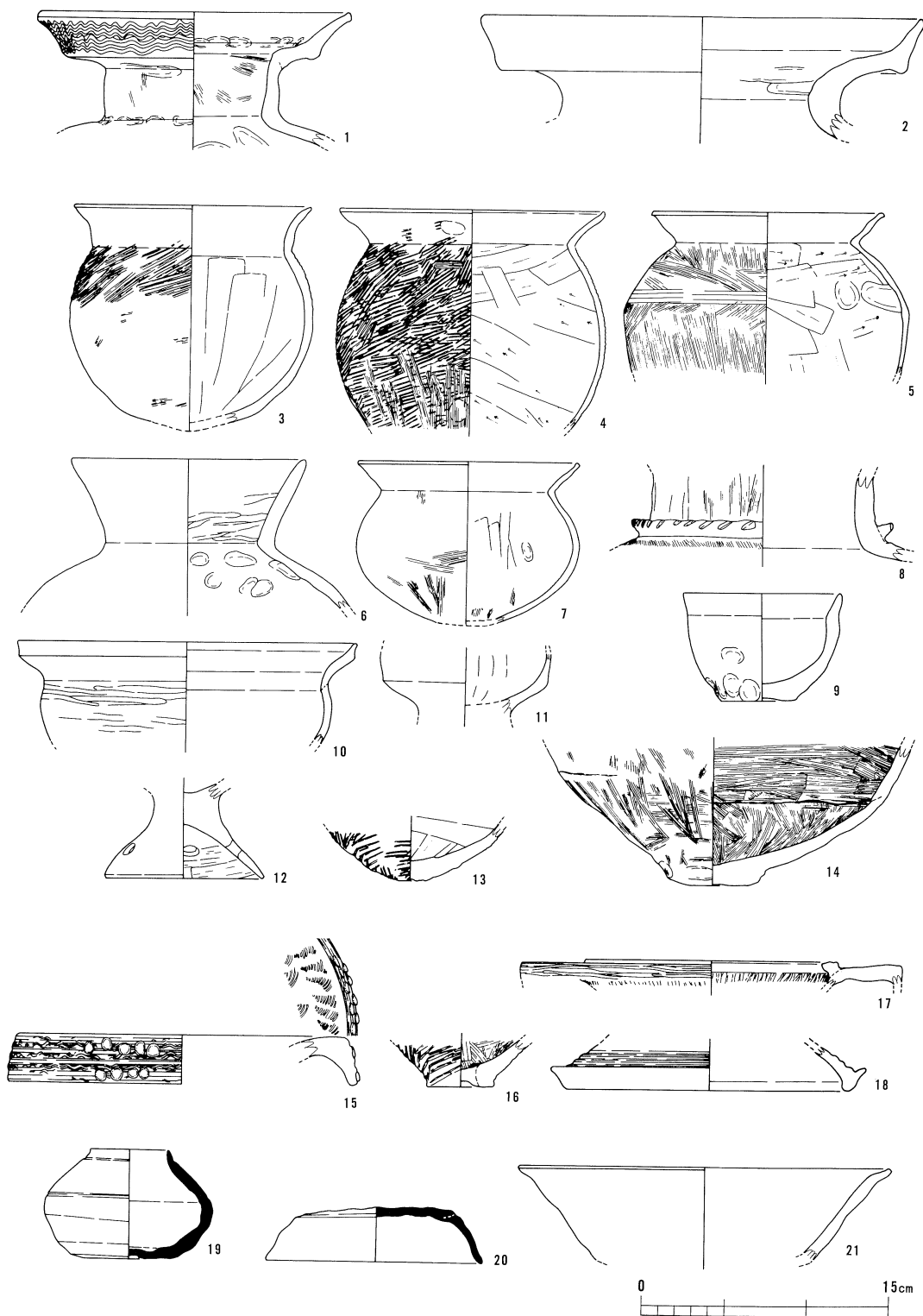


第12図 出土遺物実測図

のものとして12.8cmのものがある。いずれも端部はゆるく外反して内面に段を有し、天井部の2/3以上が回転ヘラ削りされているが口径の小さいものの方が、各部の段や境界はより鋭さを持つ。13・14はSH-3から出土したもので、13は土師器の甕で、体部外面は粗いタテハケ、内面は板ナデ整形である。14は須恵器の杯蓋で、口径14cm、口縁の長さ2.5cmで端部内面に明瞭な段を有し、回転ヘラケズリも天井部の2/3を占める。15はSH-4からの出土である。土師器の高杯杯部で口径は13.2cmである。口縁はヨコナデで端部は内面に肥厚する。外面はヘラミガキが一部に認められ、内面はナデ整形。胎土は緻密で細かな金雲母を含む。16・17はSH-6の範囲から出土している。16は、器壁3mm弱の甕で、口縁部は丸く、内側に少し肥厚する。剥離が激しく調整はあまり残っていないが、口縁部にヨコナデ、体部外面にタテハケ、内面にケズリの痕跡がかすかに見られる。17は、口縁に刻みを有する弥生時代中期の壺の口縁で、口径は13.2cmである。剥離のため調整は不明。SH-6に伴う土器ではない。18はSP-5からの出土である。弥生時代中期の高杯杯部で、突帯の上面張り出し部がヨコ方向にナデられている以外は、全て細かいミガキが施されている。

第13図1、2は土器群の上層から出土したものである。どちらも二重口縁の壺で、口径は、18.7cmのものとして26.6cmのものがある。前者は、頸部が直立気味の広口壺口縁に、内外面とも明瞭な段を境にして口縁が外反していくもので、口縁部に5条/0.9cm原体の櫛状工具による波状文が2本施される。細砂を多く含み赤茶色をしている。後者は、頸部が強く外反した広口壺口縁に、段で画して外傾気味の口縁につづいていく。外面は、段の部分が下部へ肥厚している。無文で、ナデで仕上げられている。

3~14は土器群の中層から出土したものである。甕は3~5・7で、3は体部外面が右上りのタタキで腹部以下はタタキの上からナデを行ない、体部内面は下から上へ板ナデを施している。直立気味の頸部から徐々に外傾する口縁をもち、球形に近い体部から、丸味を帯びた少し尖り気味の底部へと続くと考えられる。4は口径16cm、体部から明瞭に外反する口縁部をもち、端部は丸く立ちあがる。体部外面は6条/1cm間隔程の細かい右上りのタタキが丁寧になされ、下半部はその上から細かいハケを施す。タタキはやや右上りのタタキの上から傾斜の急な右上りのタタキが施されている。体部内面は頸部直下までヘラ削りがなされているが、砂粒の動きはあまり激しくない。5は、口縁端部が丸く外側へ少しふくらむ。体部外面は、細かいタテハケの上から、櫛描直線文を境に、上は左上りのハケ、下は右上りのハケを直線文沿いに施している。直線文は、4条/0.8cm原体で、直線文の少し下が、張り気味の腹部となる。体部内面は、頸部直下からのヘラケズリで、一部指ナデの跡も見られる。7は口径13.2cm、内湾気味に外傾する口縁を持ち、端部は内側へ肥厚する。腹部が横に丸く張ったやや扁平な小型の丸底甕で、外面はハケ調整、内面は指跡残るが不明。6・8は壺で、6は頸部内面にヘラミガキのある直



第13図 出土遺物 実測図

口壺で、体部内面は指で強く押えナデられている。外面は、付着が多く詳細不明であるがナデと考えられる。8は、貼付突帯を有する壺頸部で、突帯には刻み目がある。頸部、体部外面はハケ調整である。9は、口径9.5cm、器高6.6cmの小型鉢で、口縁はつまみあげたのちヨコ方向にナデ、体部は内外面ともナデ仕上げで、底部外面にはワラ(?)の跡がついている。10は、口径20.6cmの中型鉢で、強い外傾の頸部から、端部が上方へ立ちあがっている。体部外面にはミガキが施される。11は、小型高杯の杯部で、内外面ともナデて仕上げられている。土器群中にもう一点これと同タイプのもが含まれていた。12は、低脚台部で底径は9.5cmで、3方向に円形透かし穴があり、これらは、焼成前に両側から穿孔されている。外面はナデで、内面はヨコ方向の弱いヘラケズリがなされている。13の甕は、わずかに平面を持つ突出した底部で細かい右上りのタタキが外面に施され、内面は板ナデである。14は、内外面とも丁寧なハケを施された、壺底部で、内面は接合部でヨコハケ(10条/1cm原体)とタテハケに分かれるが、上部のヨコハケが後から施されたと考えられる。

15~18は土器群の下層から出土したものである。15は、装飾の多い壺口縁で、口径は20cm。外面には4条の凹線の上から櫛描波状文を施し、その上から円形浮文を貼りつけている。口縁内面には、櫛描線形文(10条/1.7cm原体)が、2段に各々違った感じで刻まれている。17は、中期の高杯でヘラミガキが、突帯部と張り出し部内面以外の全てに丁寧に施されている。18は、高杯の脚台部で、底径17.2cm、4条の凹線を持つ。

19~21は包含層から出土したものである。19はB-3区より出土した完形の短頸壺で、口径4.8cm、底径6cm、器高6.7cmである。頸部と腹部にゆるい沈線が走り、全体に回転ナデが行なわれ、底部は回転ヘラ切り。胎土は一部に2~3mm大の砂粒も含むが、あまり粗くなく、焼成も良好である。20は、A-3区より出土した扁平な杯蓋で口径は13.1cm、天井部は回転ヘラ切りのままで、口縁部はゆるく外反し端部は丸くおさめる。天井部と口縁部の境にわずかに凹線らしきものが残る。21は、口径22.4cmの高杯杯部で、外方へ一直線に開き、口縁端部がつまみあげ気味におわっている。破損部分より、内側へくびれていくと考えられる。全面剥離して調整は不明。

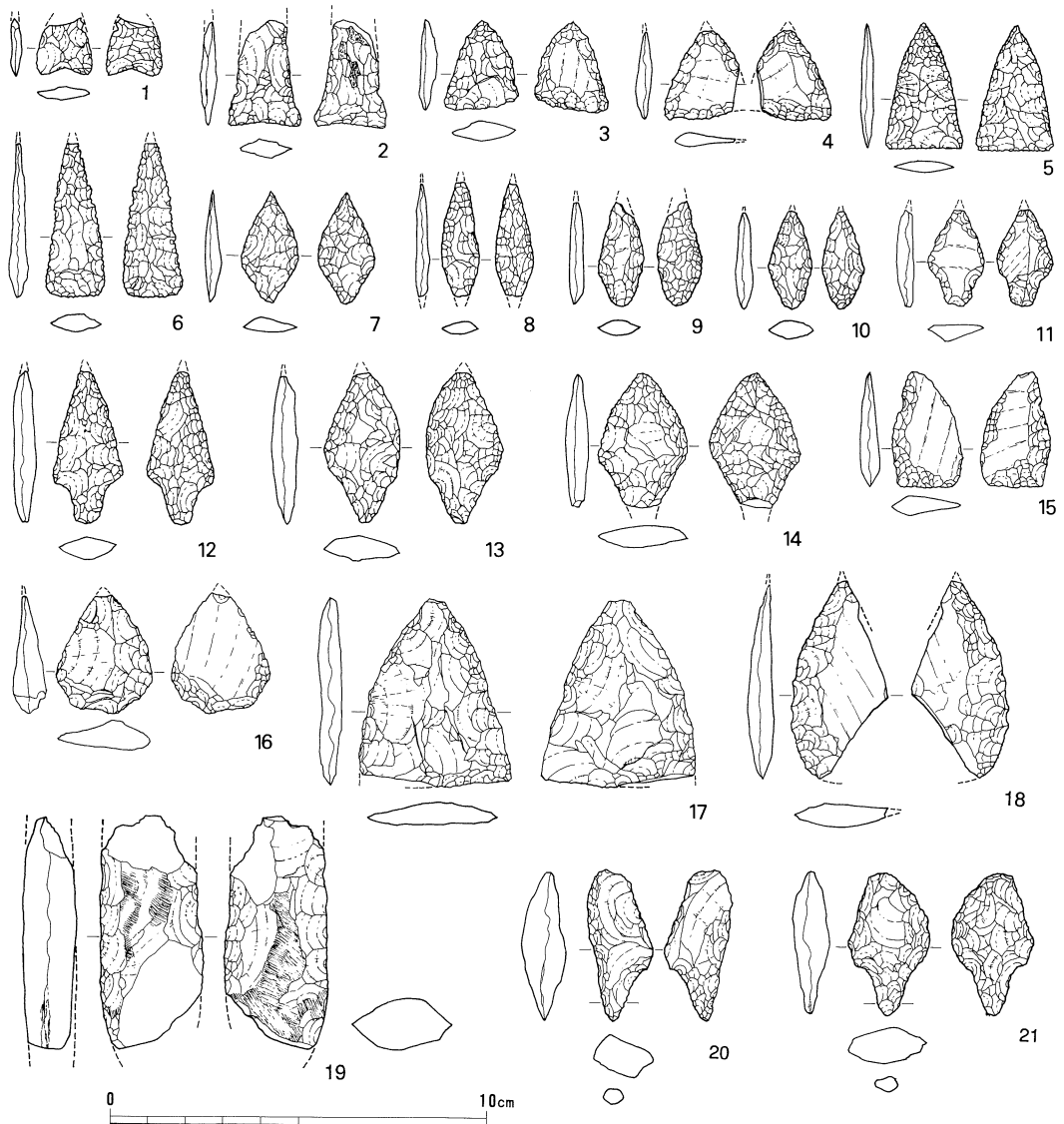
石器 (第14図・第15図)

打製石器 打製石器には石鏃、尖頭器、石錐がある(図14)。

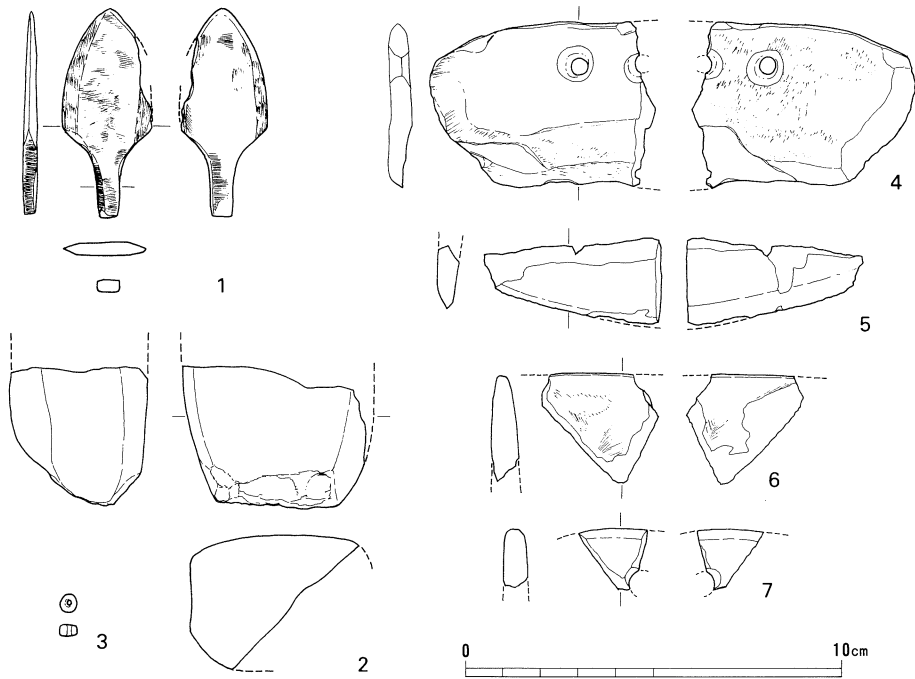
石鏃は16を数える。1・2は凹基式であるが双方とも基部の抉りは浅く、先端部を欠失する。小型の1は重量0.8g、大型の2は2.8gを量る。3・4は平面形が正三角形に近い平基式である。両者とも大剝離面を残し、重量はそれぞれ2.1g、1.7gを量る。5は二等辺三角形を呈する平基式である。丁寧な剝離で仕上げられた整美な完形品で、重量は2.3gを量る。6は重量2.8g、長さが4cmを超える大型の平基式である。刃縁の調整剝離は鋸歯状に施される。7~10は

凸基式に属するが、いずれも小型である。完形の7はやや幅広で重量1.35g、両端を欠失する細身の8は1.1gを量る。9・10はともに先端を欠き、重量はそれぞれ1.35g、1.2g。11～14は有茎式である。11は大剥離面を大きく残す重量1.6gの小型品で、茎部の作り出しは明瞭である。12も茎部が明瞭な典型的な有茎式で重量は3.75g。13・14はともに茎部が明瞭でない幅広の大型品で、それぞれ5.4g、4.6gと重い。15は平基式の未製品、16は平基式または凸基式の未製品と考えられる。

17～19は尖頭器であるが、形態は各々異なる。17は三角形を呈する扁平な尖頭器である。先



第14図 出土石器実測図



第15図 出土石器実測図

端部に原面を残していることから完成直前の未製品とも考えられるが、刃縁および基部の調整剥離はほぼ完了している。重量は13.4gを量り、鏃として使用するには重すぎよう。類別は稀であるが、東大阪市山賀遺跡9号墓木棺内から似たものが出土している。18は木葉形の尖頭器だが、基部は尖らずに円弧をなすと思われる。先端および片側の刃縁から基部にかけて大きく欠損するが、重量は現状で7.95gと、鏃としては重い。19は打製石槍あるいは打製石剣と呼ばれる尖頭器の基部に近い部分である。両面の中央部分がかなり広い範囲にわたって意識的に研磨されているのが注目されるが、製作に伴うものか使用に際しての二次加工であるかは明らかでない。基部に近い部分の刃縁には明確な刃つぶしが認められる。

20・21は石錐である。21には顕著な使用痕がみられる。

以上に述べてきた21点の打製石器の石材は、肉眼観察によればすべてサヌカイトである。二上山産のものが主流であると思われるが、香川県など西方の地域に産地を求め得る可能性のあるものも少数ながら認められ、今後の化学的原産地比定の作業が待たれる。

出土した遺構については、1がSH-3、3・8・10・11がSH-2、19がSH-5、12がSP-1、5がSP-65、18がSP-50、15がSP-119、17がSP-315、4がSD-3である。その他は包含層あるいは攪乱土中などから出土した。

磨製石器・玉類 磨製石鏃、石斧、石庖丁および滑石製小玉がある(図15)。

第III章 新免遺跡第28次調査の概要

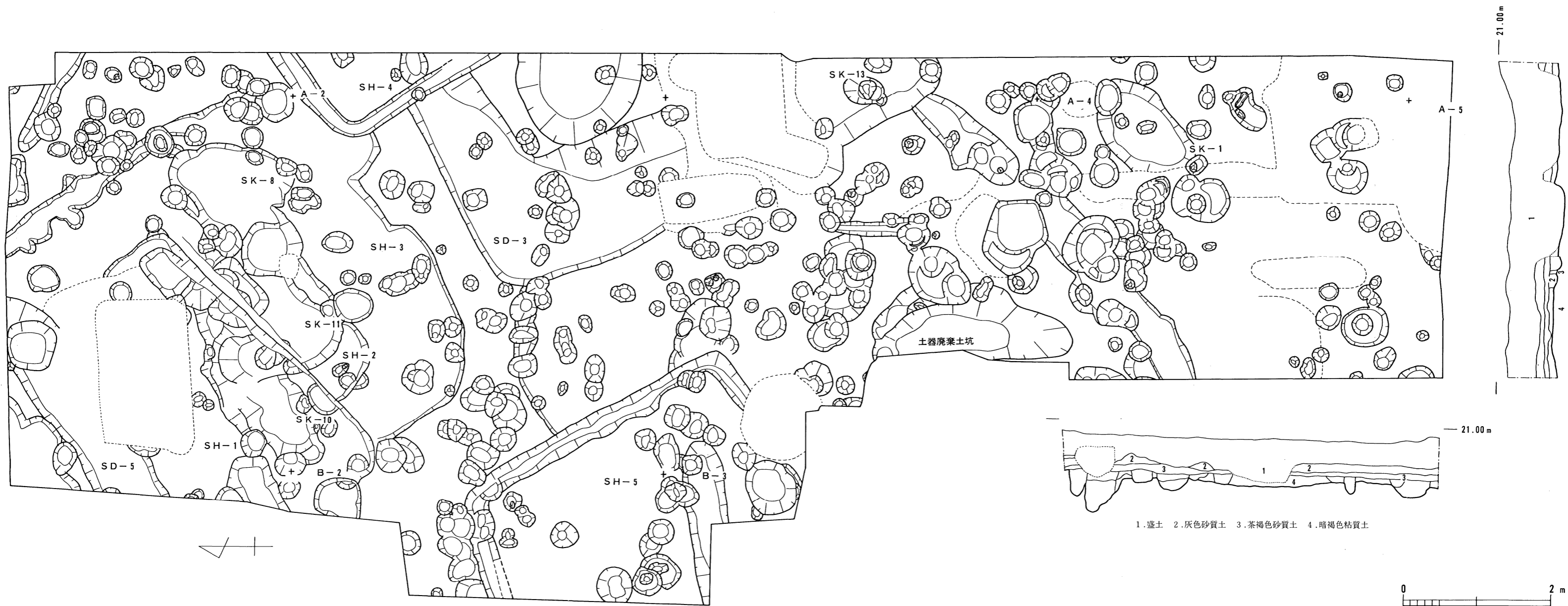
1は有茎式の磨製石鏃である。刃縁の一部を欠失する。断面は扁平な六角形となる。青みがかかった黒灰色を呈し、石材は肉眼観察によれば粘板岩と思われる。

2は太型蛤刃石斧の刃部付近の断片である。刃部先端は使用による剥離が目立つ。4～7は石庖丁である。4は二孔が確認できる。5は刃部の断片、6・7はともに背部の断片である。石材は、肉眼観察によれば4・6・7が粘板岩、5が結晶片岩である。

3は滑石製の小玉である。直径5mm、高さ3mm、孔径1mmを計る。

出土した遺構については、4・7がSH-1、6がSH-3、3がSK-6、1がSP-36である。

註 西口陽一他『山賀(その3)』大阪文化財センター、1984。



第16図 遺構全体図

第IV章 島田遺跡第6次調査の概要

1. 調査の経緯

調査地点は、豊中市庄内栄町2丁目48番地に所在する。庄内地区再開発に伴う共同住宅建築申請が提出された。この申請者は営利目的の共同住宅と個人居宅が共存するため、延面積から個人が占有する面積を按分し、その個人部分のみ調査費を支出し、残りは原因者負担で実施したものである。

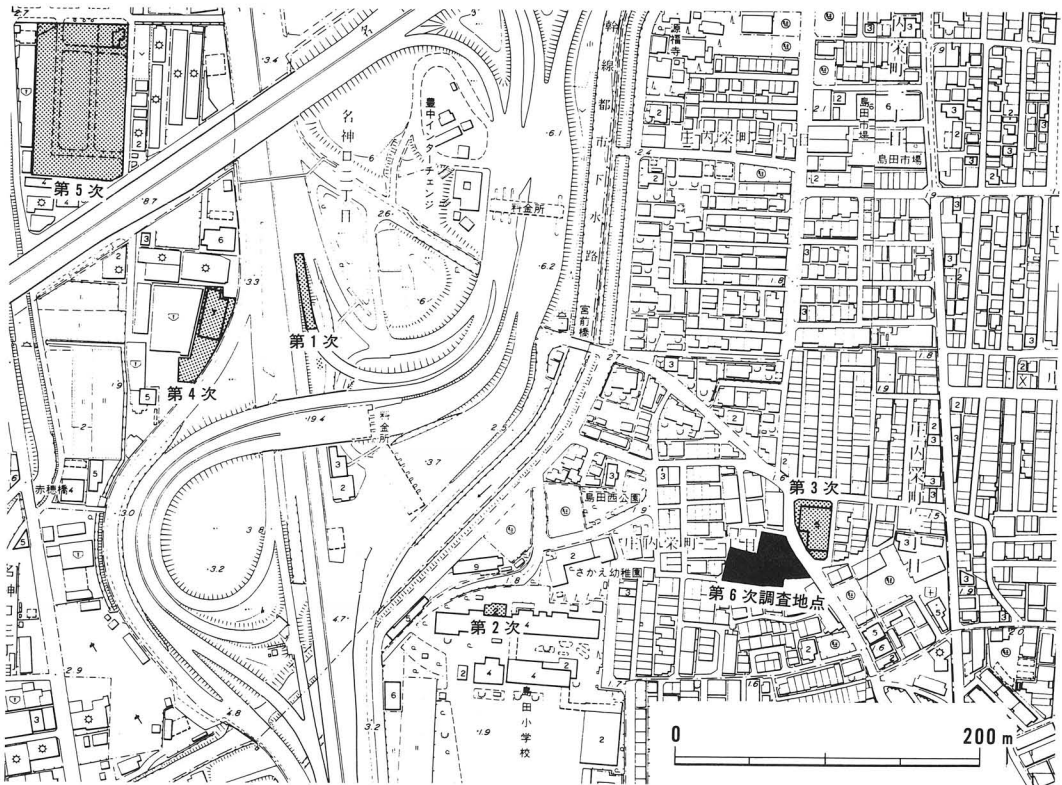
2. 調査の概要

(1) 基本層序と地区設定

調査地は東西に約50m、南北は約15mで東西に長い範囲である。調査の結果、遺跡は沖積地の微高地



第17図 試掘調査の状況



第18図 調査地点位置図

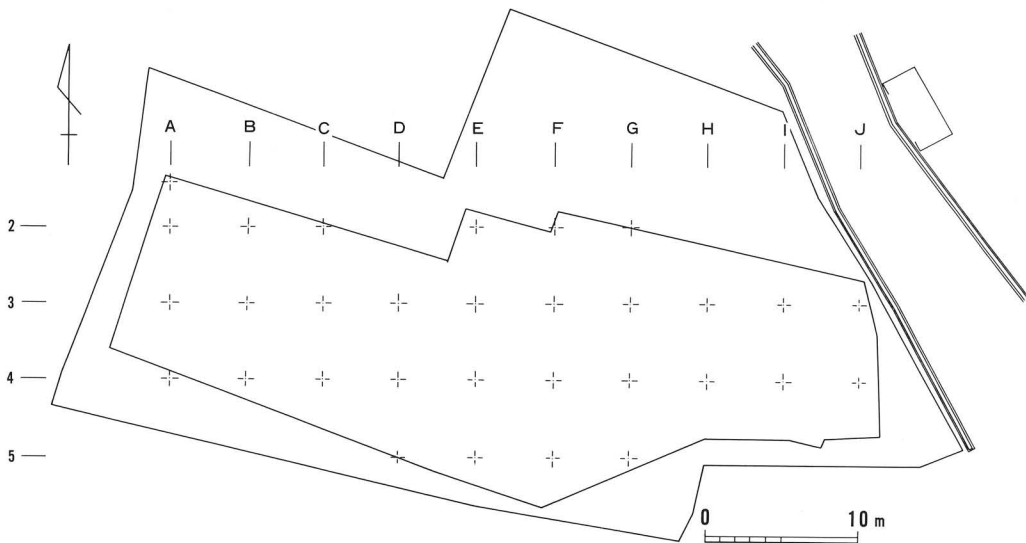
に立地していることが判明したが、この微高地は東側に向かって落ちるため、西側と東側とでは層序を若干異にする。ここでは遺構が多く存在する西側の部分を基本的な層序として扱うこととする。

第1層は現代の盛土である。第2層は旧耕作土（表土）である。現代の整地において、西側半分は削除され東側の低い部分のみ残存する。第3層は包含層で大きくは2分される。上層の方が色調が濃く、若干砂質が強い。下層は上層より淡く粘質土である。色調は灰褐色で約25cmの堆積がある。第4層は淡黄褐色の粘質で微高地を形成している最上層の堆積土である。多くの遺構はこの面まで下げなければ確認することはできなかった。基本的には無遺物層であるが、東側の傾斜地においてはこの層が流出し、その中に古い布留式土器が認められる。第5層は上面に微砂層が薄くあり、下部は粗い砂層である。この状況から氾濫に伴う堆積土であり、この中に弥生時代後期の土器が存在する。以下は砂と粘土の互層となる自然堆積層である。第4層の遺高面はT P1.2mである。



第19図 土層断面の状況

地区設定は磁北による南北ラインとそれに直行する東西ラインにより、5 mの方眼網を設け、南北ラインを東へA、B、C…とし東西ラインは北から南へ1、2、3…とした。



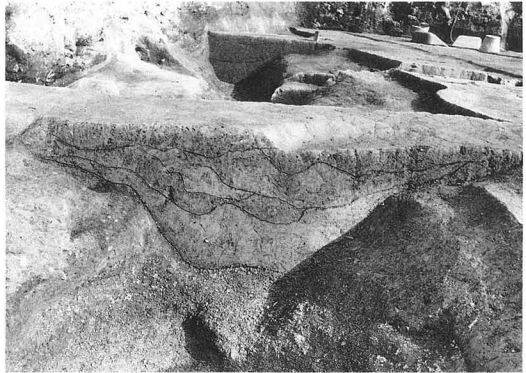
第20図 調査範囲図

(2) 検出遺構

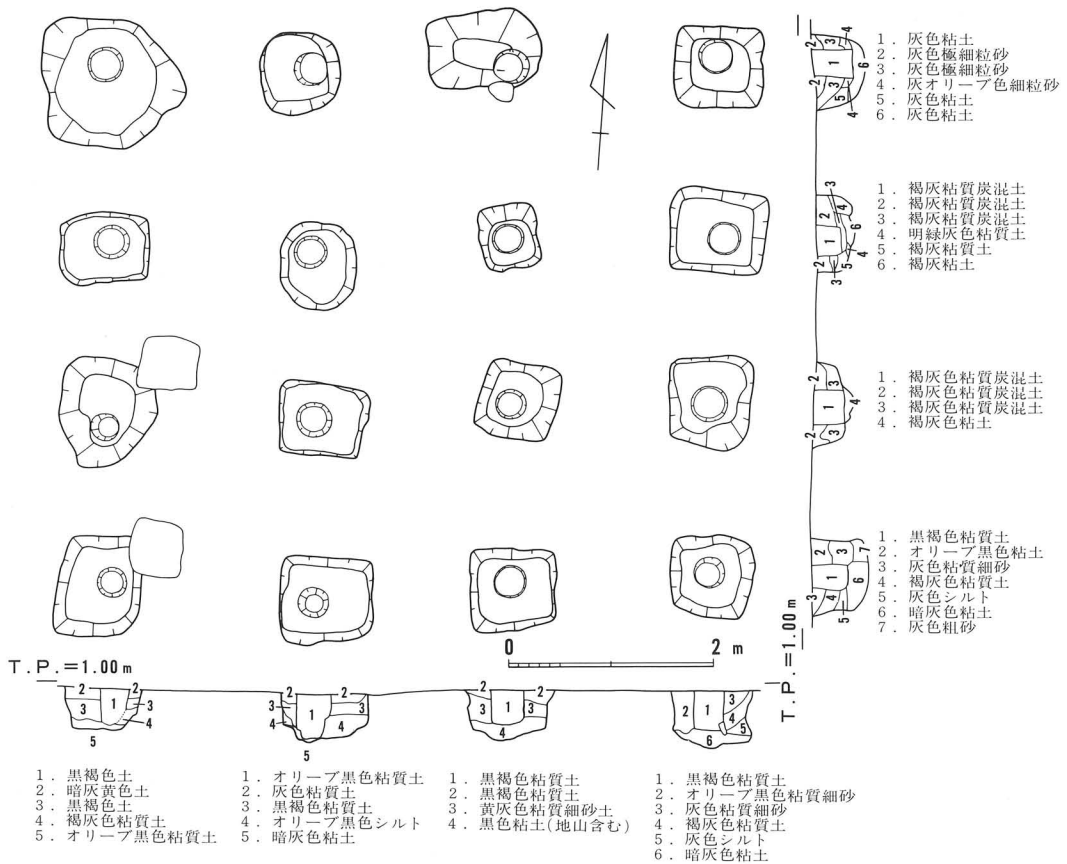
検出した遺構は古墳時代～平安時代まで各時代多岐にわたる。その中でも遺構の密集度は5世紀後半～6世紀前半と7世紀～8世紀が最も高い。遺構自体は12世紀まで細々であるが存続し、後半には終焉をむかえる。ここでは主要なものについて報告する。

大溝 (第21図)

調査区の東側部分 I ラインより東側で検出したものである。同一方向にいく条かあり、各時期で異なる。包含層上面で検出されたものが最も新しく、微高地の端に位置している。微高地の拡大に伴って溝も外側に開削される状況である。溝の方向は北西から南東方向で



第21図 大溝断面の状況



第22図 掘立柱建物1 平面図・断面図

南流する。最も新しいSD-1で、溝幅約1.8m、深さ0.5mである。

掘立柱建物1（第22図）

H-3・4～I-3、4地区において検出した3間×3間の総柱の建物である。柱穴のプランは方形を呈し、柱の直径は30cmである。規模は南北一辺5.1m、東西5.8mで東西1間は1.95mに復元できる。7世紀後半から8世紀前半の建物と推定される。

井戸1（第23図）

C-3・4地区において検出した曲物をすえた井戸である。掘りかたの平面プランは南北にやや長い楕円形気味を呈し、南北径3.3m、東西径2.8mで深さ1.45mである。底面の南端で曲物が1段残存していた。その上方は有機物と粘質土の互層の堆積土が弧状を呈していた。このことから井戸上部の枠組は取りのぞかれ、廃棄されたものとみられる。時期は11世紀中ごろと推定される。



第23図 井戸1 断面

井戸2（第24図、第25図）

井戸1の東側、D-3地区に検出した木組の井戸である。西側の掘りかたの一部が井戸1に切られている。掘り方の平面プランは不定形の円を呈し二段に掘られ、上段は南北径3.7m、東西径3.3m、深さ1.1mで、下段は直径1.6mの円形を呈し、深さは0.4mである。検出した上面から底までは約1.5mの深さになる。

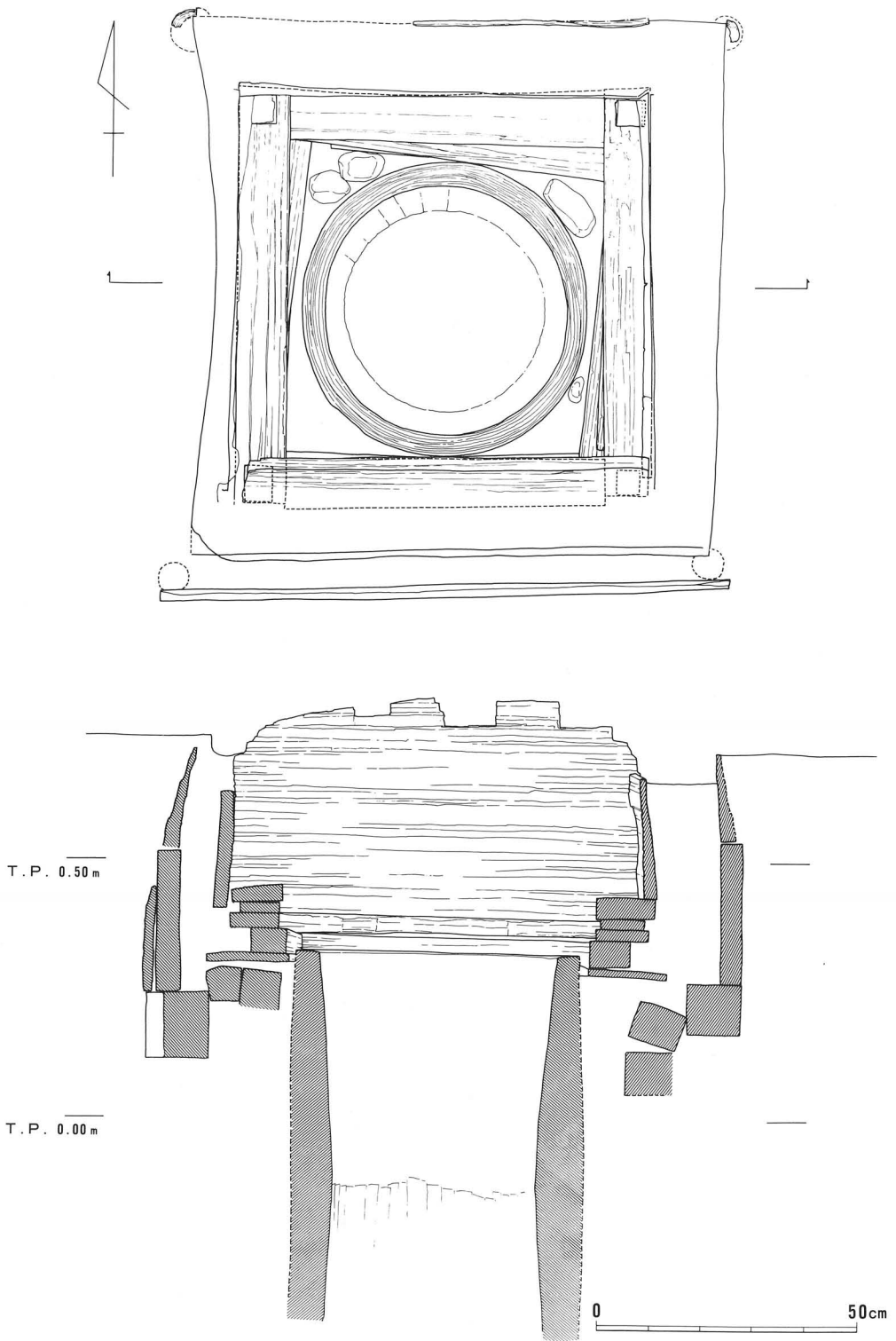


第24図 井戸2

木組は重厚なつくりで掘り方の中央よりやや南側に組まれている。上部は二重に枠組され、下部は丸太を刳りぬいた井筒を使用している。この井筒は、外面2ヶ所において把手状のものを剝離した痕跡が対でみられ、内面下部は縦方向に粗い削り痕がみられることから臼のようなものを転用していることが窺える。



第25図 甕出土状態

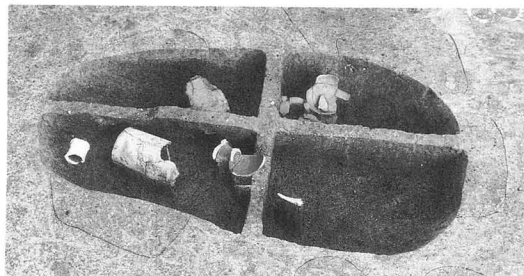


第26図 井戸2 平面図・断面図

井筒内より第34図13、14にみられる遺物が出土し、木枠内堆積土上面では第25図のように甕が置かれていた。これは井戸廃絶に伴う祭祀に用いられたものであろう。井戸の使用年代は上記の遺物等から7世紀中葉から8世紀前半にかけてのものとみられる。

土坑46 (第27図)

井戸1の北側、C-2地区において検出した土坑である。平面プランは中央で南北径1.7m、東西径0.97m、深さ0.2mで南北に長い楕円形を呈する。土坑内上部より第35図のような遺物が出土している。



第27図 土坑46検出状況

落ち込み2 (第28図)

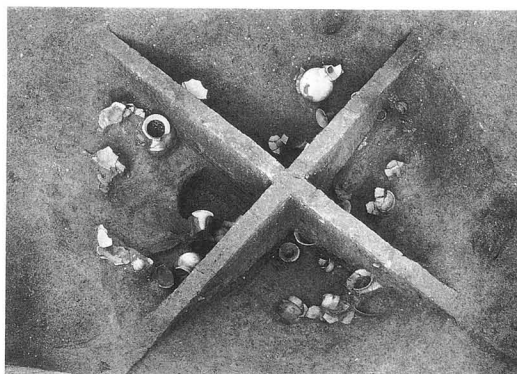
中央部北端、F-2～G-2地区において検出した大型の土坑である。北西から南東方向に長軸をとり、長径5m以上、短径1.6～1.8mで長方形を呈する。深さは約0.4mであるが一定していない。この方向は微高地の地形に沿っている。同時期の溝も同一方向に設けられ、溝は内側に位置している。この土坑内の堆積土の状況は焼土を含んだ炭層が上下2層にみとめられる。これらの層の中から動植物の遺体が土器片とともに多くみられることからゴミ穴と推定される。古墳時代中期後半から後期前半のものである。



第28図 落ち込み2断面

土坑27 (第29図)

中央部南端、G-4・5地区において検出したほぼ円形の土坑である。直径は約2.4m、深さは約0.7mで断面形は底が平坦に近く、側面はすり鉢状である。井戸に使用されたものであろうか。堆積土は中間下部に炭層が入る。その上方に多くの土器が出土している。器種は甕と小型丸底壺、高杯等がみられるが、甕と高杯が多くを占めている。古墳時代前期後半から終末の時期である。



第29図 土坑27 遺物出土状態

溝19 (第30図)

調査区の中央部において検出した溝である。北西から南東方向に開削され、微高地の地形に沿っている。検出した長さは約15m、幅は0.6m、深さは0.2mで、断面はゆるいU字形を呈す

る。溝内より破損した土器が出土する。時期は古墳時代前期後半から終末にかけてのものである。

土器群

F-5、G-5地区において検出したものである。径約1mの範囲に小山状に盛り上がった状態で出土した。器種としては甕や製塩土器が多く、特に製塩土器は細かく破損された状態である。時期は古墳時代初頭である。

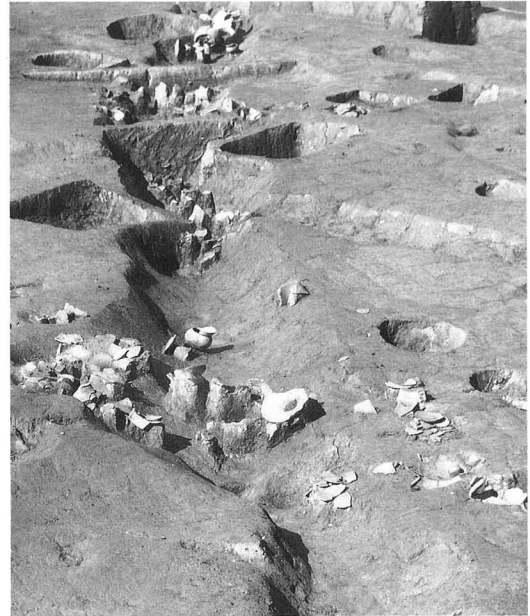
(3) 出土遺物

大溝 (第31図)

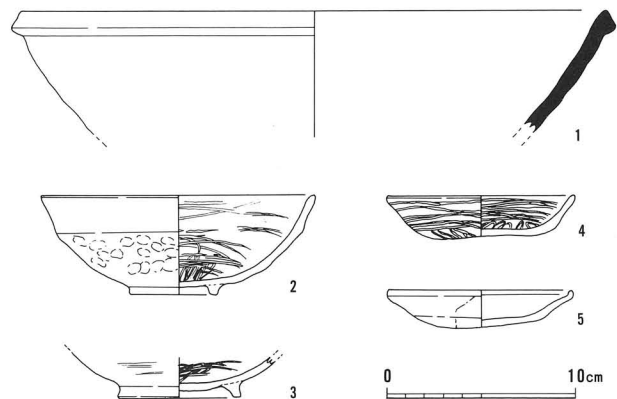
包含層上面遺構の大溝からの出土遺物である。1は、東播系と考えられる須恵器の鉢である。復元口径31.0cmを測る。口縁端部は外

方へ肥厚し、内外面は回転ナデ調整である。2は、口径14.4cm・高台径4.6cmを測るほぼ完形の瓦器椀である。底部には断面方形の高台を貼付し、口縁端部は丸くおさめる。外面は口縁部に強いヨコナデを施し、体部には指頭圧痕を顕著に残す。ヘラミガキはみられない。内面は不規則なヘラミガキ調整を行う。体部外面と口縁部内面の一部に炭素吸着がなされず灰白色を呈する個所がある。3は高台径6.4cmを測る瓦器椀である。「ハ」字形にひらく比較的安定した高台が貼付されている。内面は不規則なヘラミガキ調整、外面は指頭圧痕が残る。底部内面には重ね焼き痕が観察され、一部灰白色を呈する。4は瓦器皿であるが、器面は灰白色を呈し炭素の吸着がみられない。底部はやや凹面をなし、体部は内湾気味にたちあがる。口縁部は強いヨコ

ナデを施してやや外反し、端部は丸くおさめる。口縁・体部内外面はヨコ方向へのヘラミガキ、底部内外面は鋸歯状のヘラミガキを施す。口径9.8cm・器高2.3cmを測る。5は「て」字状の口縁部をもつ土師器皿である。口縁端部は直上へつまみあげられ、底部外面には指頭圧痕及び口縁に直交して接合痕が残る。やや厚手で粗雑感がある。



第30図 溝19 遺物出土状態



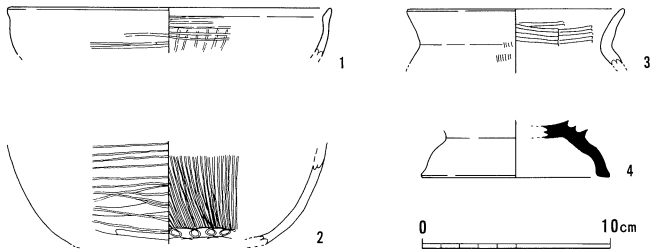
第31図 大溝 出土遺物

色調は浅黄橙を呈する。

包含層上面の大溝 出土遺物は、東播系の鉢や2の和泉型瓦器碗の年代観を見る限り、概ね12世紀代のものと考えられる。

掘立柱建物跡 (第32図)

1・2は土師器杯である。1は内傾する口縁端面をもち、内外面に横方向のヘラミガキを行い、内面には放射状暗文を施す。2は体部の一部を残すのみで口縁の形状は明らかではない。外面は下半部をヘラケズリしたのち横方向のヘラミガキを行う。内面は斜放射状暗文とラセン状暗文を施す。両者とも胎土は精良、焼きあがりは堅緻で橙色を呈する。3は口径11.3cmを測る小型の土師器甕である。口縁部は「く」字状に外反し、内面に横方向のハケ調整、体部外面には縦方向のハケ調整を行う。4は須恵器の脚部で、底径約9.8cmを測る。

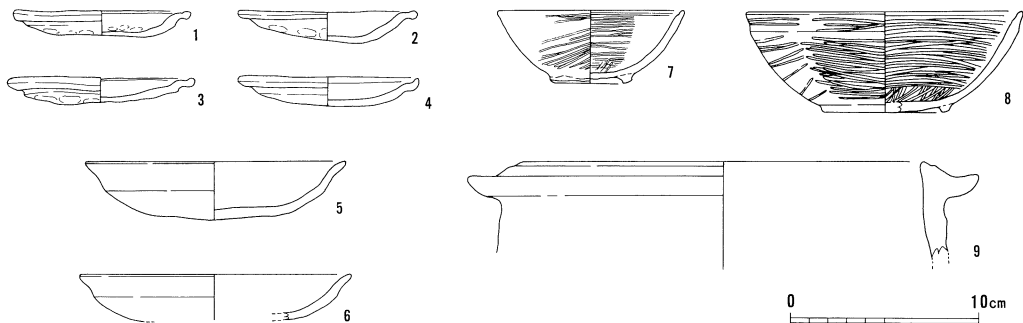


第32図 掘立柱建物1 出土遺物

以上は柱穴内からの出土遺物で、時期は概ね飛鳥時代前半期と考えられる。

井戸1 (第33図)

1～6は土師器皿である。1～4はいわゆる「て」字状口縁の小皿であり、いずれも口径は約9.5～10cm内外におさまり規格性の高いものである。この井戸からは同様の土師器皿が10枚完形で出土している。口縁部に強いヨコナデを行い外反させ、端部は内側へ肥厚する。内面はナデ調整、底部外面は指頭圧痕が残り接合痕が観察される。色調は淡橙色を呈する。5・6は口径約14cmを測り、口縁部に一段のヨコナデを施し外反させる。体部から底部にかけての外面は指頭圧痕が残る。7・8は黒色土器B類碗である。7は口径10.0cmの小型の碗で、底部には扁



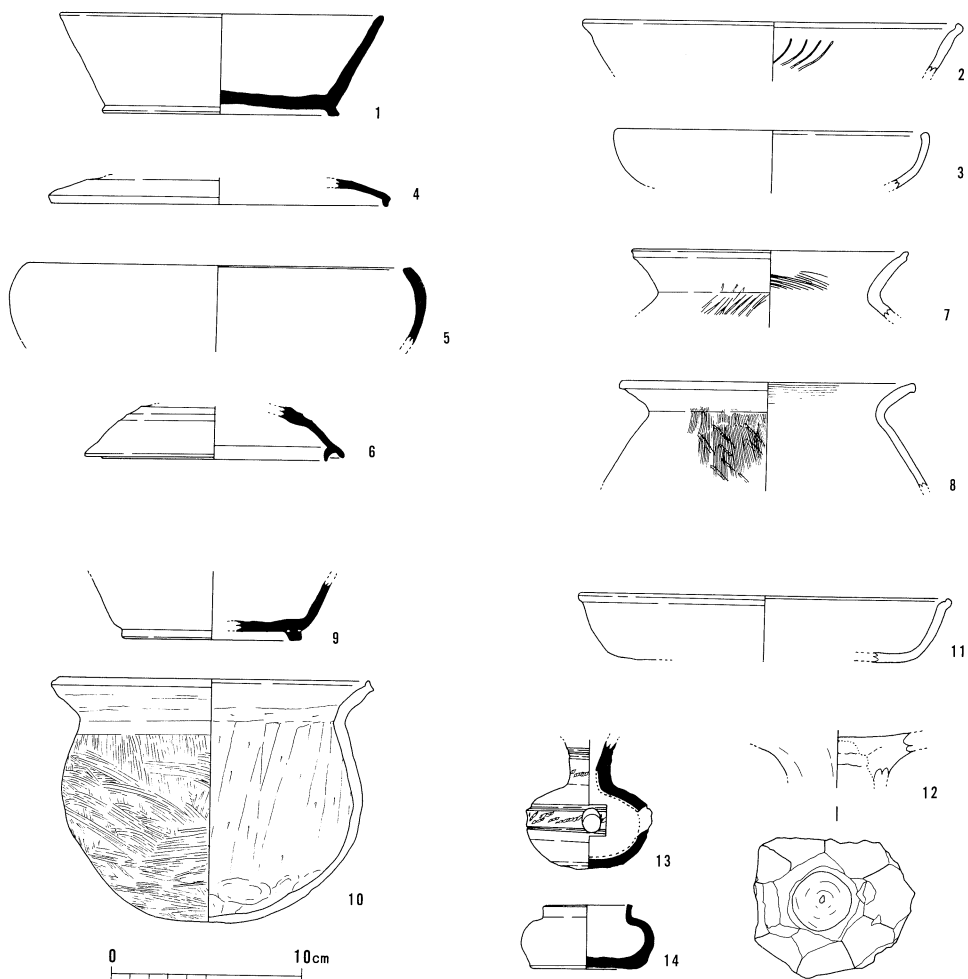
第33図 井戸1 出土遺物

平な高台が貼付される。口縁部内面には沈線が巡り、器壁は内外面とも密なヘラミガキが施される。8は口径14.4cmを測る椀で、底部には低い高台が貼付される。口縁部内面に沈線を一条施す。体部は内湾しつつ外上方にのび器壁は内外面とも密なヘラミガキを行う。9は土師器羽釜である。小片のため傾き及び口径に不安が残る。口縁部外面直下に鏝の付くもので、端部は外上方へ若干反る。胎土は砂粒を多く含み淡褐色を呈する。これらの土器は11世紀に比定される。

井戸 2 (第34図)

1は復元口径16.7cmの須恵器杯身である。体部は外上方へ直線的にのび、底部端には「ハ」字状に高台がつく。2・3は土師器杯である。2は内面に斜放射状暗文を施す。口縁部は内面に肥厚する。3は全体的に内湾する体部をもち、口縁部は小さく肥厚する。暗文はみられない。4は須恵器杯蓋である。口径は17.4cmに復元できる。5は須恵器鉢で、いわゆる鉄鉢形のものであろう。体部は内湾し、口縁部は水平な面をなす。6は須恵器蓋である。かえりを受部端より下方へ若干のびる。天井部はヘラケズリを施す。焼成不良のため灰白色を呈する。7・8は弥生土器甕である。7は体部外面及び口縁部内面に粗いハケ調整を施す。外面全面にススが付着する。8は体部にタタキ状の痕跡が観察され、その後、細かいタテ方向のハケ調整がなされる。口縁部は「く」字状に外反し端部は面をもつ。9は須恵器杯身である。体部は直線的に外上方へのび、底部には高台がつく。10は土師器甕である。体部径より口径が大きくやや扁平な形態となっている。外面は肩部から底部にかけて板ナデの後不定方向のハケ調整を施す。内面の体部はタテ方向に削りあげ、底部には指頭圧痕及びナデが残る。口縁部はヨコナデで端部を上方へつまみあげる。外面及び底部内面にススが付着する。11は土師器杯である。口縁部は内面に沈線が一条施され端部を丸くつくりだしている。体部外面及び内面はヨコナデ調整、底部外面には指頭圧痕が残る。胎土は精良で灰白色を呈する。12は土師器高杯である。杯部内面はナデ調整の後ラセン状暗文が施され、脚部は8角に面取りされている。胎土は精良で灰白色を呈する。13は須恵器甕である。口縁部を欠失する。体部に一孔を斜下方へ貫通させるが頸部が細いため内部に押し抜かれた粘土塊が残存する。頸部と体部に凹線、列点文が施される。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ調整。胎土は長石粒を含み青灰色を呈する。14は口径4.7cmの須恵器短頸壺である。口縁は直上に短くたちあがり、底部外面にはヘラ切り痕が残る。胎土は精良で青灰色を呈する。

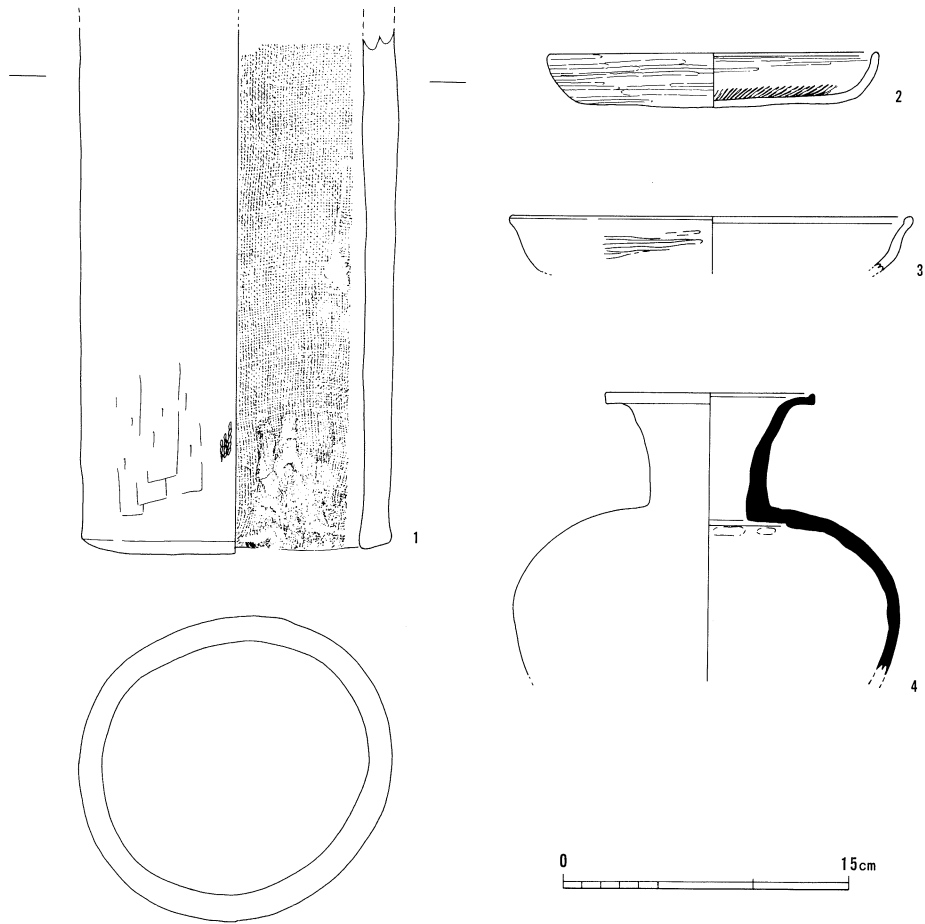
以上の遺物は、井戸廃棄後埋土(1~3)、掘方埋土(4~8)、井戸枠内埋土上・中層(9~12)、下層(13、14)から出土したものである。このうち井戸枠内埋土出土遺物の時期は7世紀前半から8世紀前半に比定される。



第34図 井戸2出土遺物

土坑46 (第35図)

1は瓦製の土管で径16.2cmを測る。内面は全面に布目痕が明瞭に残る。外面は縄目タタキ調製の後タテ方向のヘラケズリを行い、最後にタテ方向にヘラミガキを施す。焼成不良で灰白色を呈する。2、3は土師器杯である。2は平坦な底部から湾曲してたちあがる口縁部を有し、端部は丸くおさまる。体部外面から内面口縁部にかけてヘラミガキを行い、内面体部から底部にかけて斜放射状暗文を施す。底部外面は指頭圧痕を残すが概ね平滑である。胎土に1～3mm大の砂粒を含む。3は口径20.8cmを測る。体部から口縁部にかけてS字に外反し、端部は内側へ巻きこむように肥厚する。外面はヨコナデの後ヘラミガキ調整を施す。内面は摩滅により不明。4は須恵器の壺である。肩の張る体部から頸部が外反しつつのび、口縁部で水平にひらく。端部は上方へ若干たちあがる。内面の頸部のつけ根に接合痕が残り指頭圧痕がみられる。体部

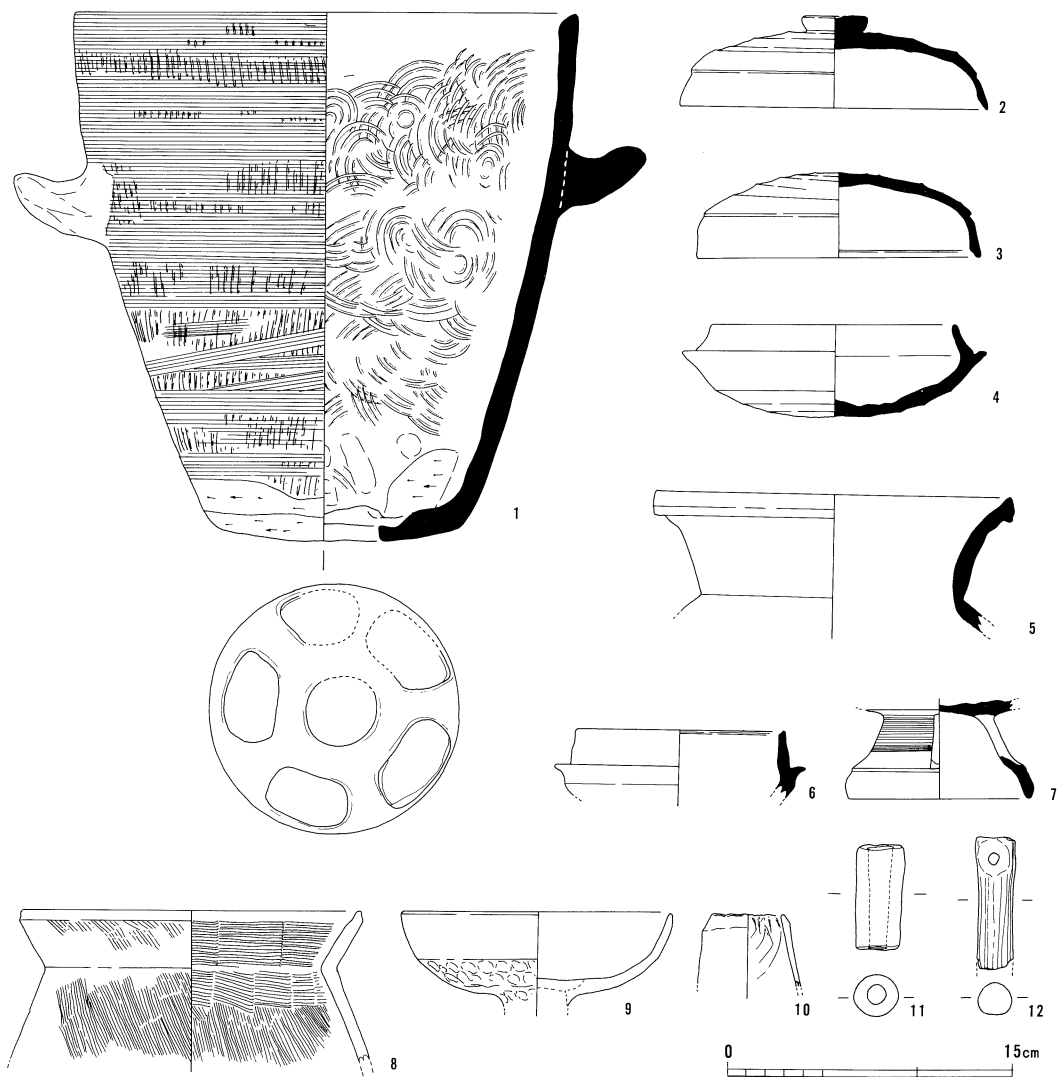


第35図 土坑46 出土遺物

外面下方に回転ヘラケズリが一部見える。器面は灰黒色、断面は赤褐色を呈している。これらの土器は概ね8世紀後半代の時期が考えられる。

落ち込み2 (第36図)

1は須恵器の甕である。やや丸みを帯びた底部から外上方へ高くたちあがる体部をもち、中位よりやや口縁部寄りに一对の把手を貼付する。口縁端部は内傾する面をもつ。底部には6個の穿孔を有する。外面は口縁部より底部付近まで平行タタキの後カキ目調整を施し、底部付近はヘラケズリ調整、底部はナデ調整である。内面は口縁部を回転ナデ調整し、体部は円弧タタキを施す。把手はカキ目調整の後に貼付。焼成があまく灰白色を呈する。2は須恵器の蓋である。口径16.2cm、器高はつまみを含めて4.9cmを測る。天井部端部の稜線は鈍くわずかに突出する。口縁部端部は丸くおさめられ段をなさない。天井部の回転ヘラケズリは2/3程度。天井部中央には平坦なつまみが付加されている。胎土はやや粗い。3は須恵器杯蓋で口径15.0cm、器高



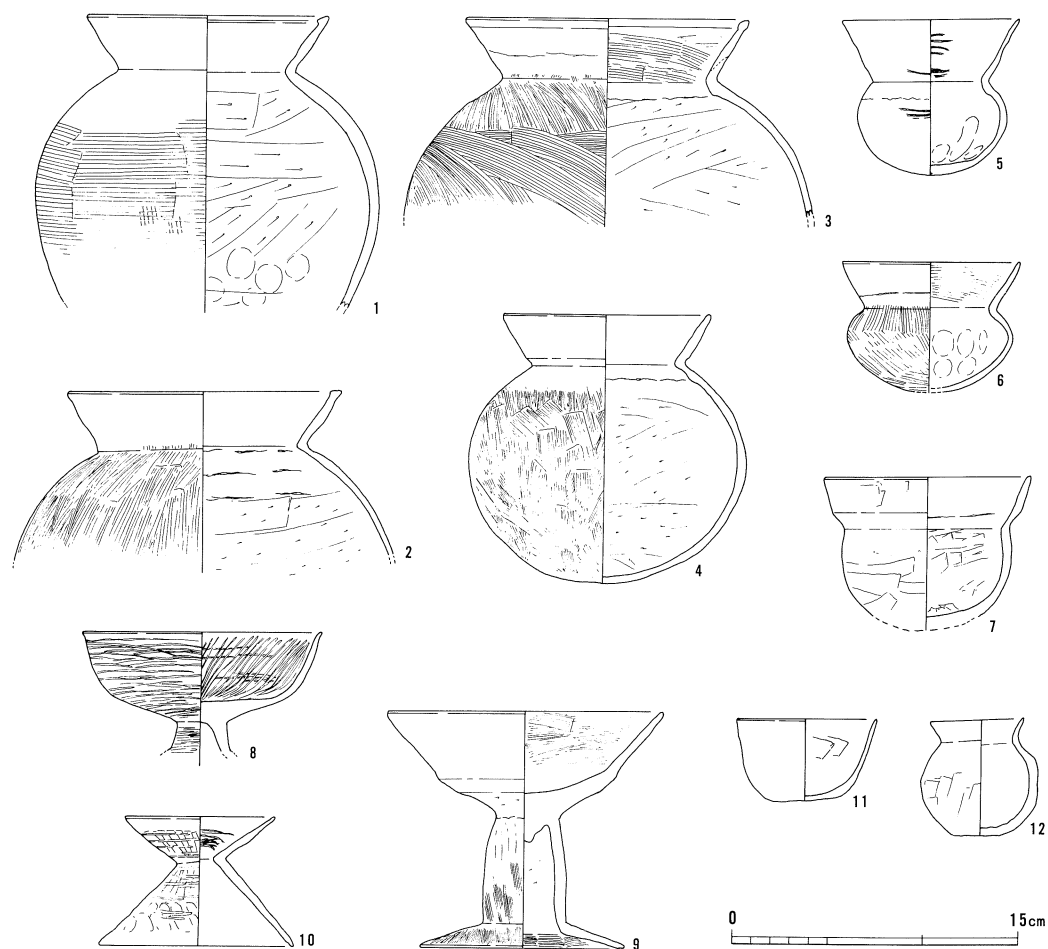
第36図 落ち込み2 出土遺物

4.5cmを測る。天井部端部の稜は鈍く丸みをもつ。口縁端部は内傾し段をなす。天井部の回転ヘラケズリは半分程度。黒色粒が目立つ。4は須恵器杯身である。口径12.7cm、受部径16.0cm、器高4.8cmを測る。たちあがりは短く内傾し端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。底部から体部にかけて2/3程度の回転ヘラケズリを行う。胎土はやや粗く、黒色粒を含む。5は須恵器壺の口頸部である。頸部は外反しつつのび、口縁端部は上方へたちあがって丸くおわり外方へ肥厚する部分は鋭く稜をもつ。内外面とも回転ナデ調整である。焼成は良好。6は復元口径11.0cmを測る須恵器杯身である。たちあがりは直上へ高くのび、端部は凹面となって内傾する。受部は水平にのびる。残存部分は内外面とも回転ナデを行う。焼成は良好。7は須恵器高杯の脚

部である。下方へ外反し、脚裾部は屈曲して段をなす。透かしは長方形で四方向に設けられていたとみられる。脚部外面上半部はカキ目調整、他は回転ナデ調整。杯部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整。8は土師器の甕である。肩の張らない体部から口縁部が「く」字に外反してのび、端部は上方につまみあげ丸くおさめる。内外面ともハケ調整を施し口縁部外面のみハケの後ヨコナデ調整を行う。外面は灰白色を呈し内面は褐色でスガが付着する。9は土師器の高杯で杯部のみ残存する。杯部は椀形で、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕が明瞭に残る。杯内面底部はヘラナデ調整、胎土は精良で橙色を呈する。10は口径3.8cmを測る製塩土器である。体部から口縁部にかけて内傾し、端部は意識的な調整を施さない。外面はナデ調整、内面は工具によるナデ調整を行う。器壁は全体的に薄い。11・12は土師質の土鍾である。11は長さ5.6cm、径2.5cmを測る管状形のもので、外面はナデ調整を施し色調は灰白色を呈する。12は残存長7.0cm、径1.7cmを測り、棒状の端部に穿孔を設ける。もう一方の端部は欠損する。全面にタテ方向のハケ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。以上の土器は概ね5世紀後半から6世紀前半代に比定される。

土坑27（第37図）

1～4は土師器甕である。球形の体部から「く」字状に外反する口縁部をもつ。1の口縁端部は内傾する面をもつ。外面は口縁部から肩部にかけてヨコナデ、体部はハケ調整を施し、内面は屈曲部の約1cm手前までヘラケズリを行う。胎土は2mm大の砂粒を多く含む粗である。2の口縁端部は水平な面をもつ。外面は体部をハケ調整、内面は体部上半に明瞭な接合痕を残し、下半にヘラケズリ調整を行う。器壁は薄く、屈曲部は鋭い。胎土は1mm大の砂粒を多く含む粗である。3の口縁端部は丸く肥厚する。外面は口縁部に接合痕を残し、体部はハケ調整を施す。内面は口縁部にハケ調整、体部にヘラケズリ調整を施す。体部外面に黒斑がみられる。4は他に較べて小ぶりの甕で、口縁端部は丸くおさめる。体部から底部にかけて外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整を行う。体部外面に黒斑がみられる。5～7は土師器小形丸底壺である。5はやや肩の張った体部から「く」字状に外反して長くのびる口縁部を有する。端部は薄く尖っておわる。摩滅のため調整は不明瞭だが、口縁部内外面及び体部外面に横方向のヘラミガキが認められる。外面は肩部に接合痕、体部より底部にかけて工具によるナデ調整、内面は強いナデ調整を行う。体部外面に黒斑を有する。胎土は精良で橙色を呈する。6は肩の張る偏平な体部をもち、口縁部は外上方へのびる。口縁部内面、体部・底部外面にハケ調整を施す。胎土は1mm大の砂粒を含みやや粗である。7は頸部の屈曲が小さく口縁部のたちあがりも短いため鉢に近い形状をもつ。頸部で段をなし、口縁部はやや外上方へのび、端部を丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は工具によるナデ調整を施す。8は脚部を欠損する土師器高杯である。杯部は椀形でやや外側へひらく口縁部をもち、端部は薄く尖っておわる。脚柱部



第37図 土坑27 出土遺物

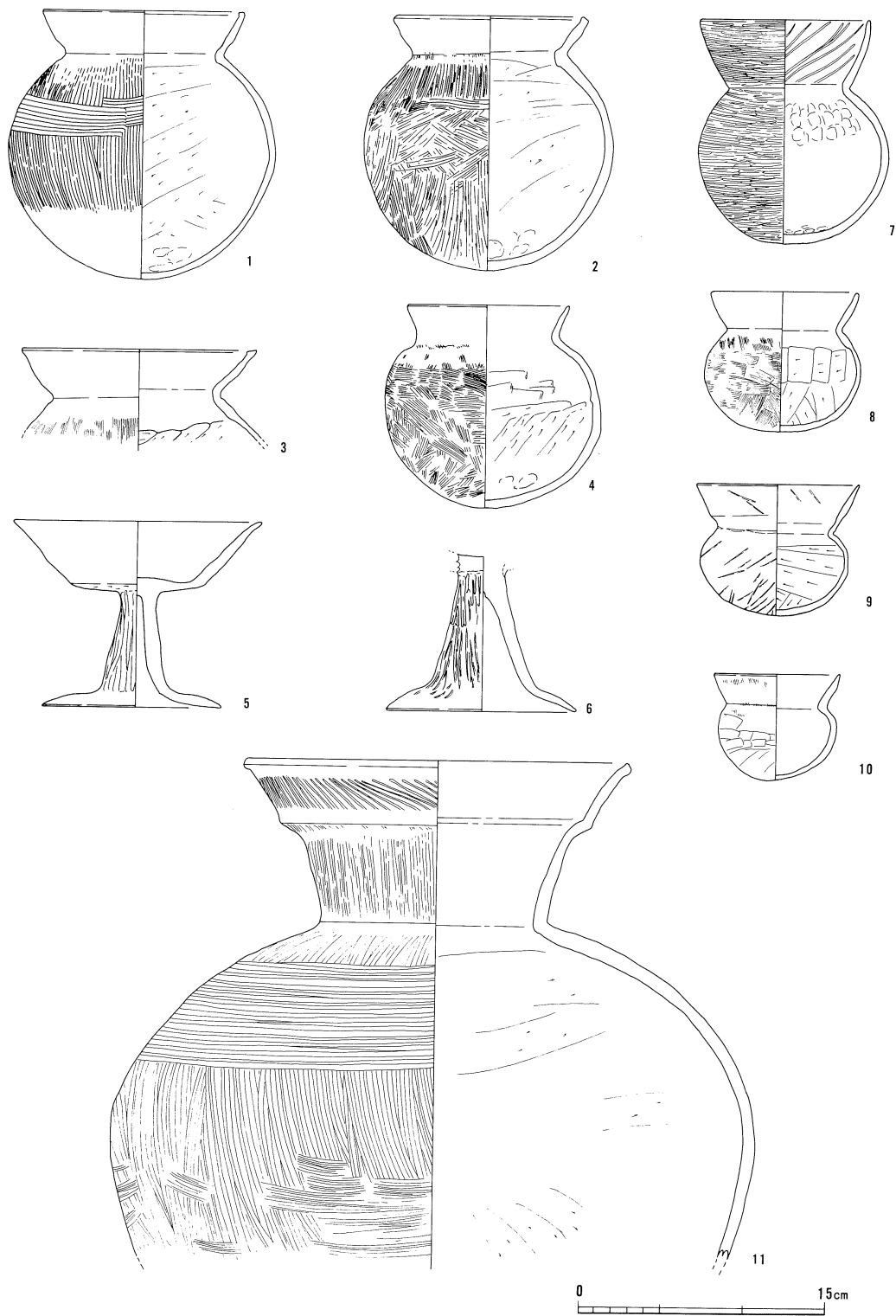
は短く、外方へ大きく裾部がひろく形態をとるものであろう。胎土は精良だが石英粒を少量含む。9は土師器高杯である。杯部は体部より屈折して外上方へのび、口縁端部は丸くおさめる。屈曲部の稜線は鈍い。脚柱部はやや膨らみながら直立し、裾部は脚柱部より鋭く屈折して外方へひろがる。口縁部外面はナデ、内面はハケ調整、体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整、脚柱部外面はハケの後一部ヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整、裾部は内外面ともハケ調整を施す。杯部外面に黒斑を有する。10は受部径8.0cm、裾部径10.4cm、器高6.8cmを測る有孔小型器台である。受部、脚部ともに直線的に外方へひろく。受部中央に一孔を貫通させる。受部内面をヨコ方向のヘラミガキ、外面はヘラケズリの後ヘラミガキ調整。脚部外面はヘラケズリの後ヘラミガキ調整を施し下半部に指頭圧痕を残す。内面はヨコナデ調整。11は器高4.3cm、口径7.4cmを測る。底部は平坦で、体部から口縁部にかけて外上方へ直線的にのびる鉢状の形態をもつ。作りは粗雑で、口縁部は正円をなさない。調整は不明瞭だが、外面はナデ調整、内面に一

部工具によるナデ調整が観察される。器壁は薄く、胎土は1～2mm大の砂粒を多く含み粗である。2次的に火をうけているとみられる。12は口径4.8cm、器高6.2cmを測る小形の壺である。底部はやや平坦で、球形の体部から口縁部が短く外反する。端部は薄く尖っておわる。外面は工具によるナデ調整、内面は指頭圧痕が残る。

以上の遺物は6・10・12が第1層、2・7・9が第2層、1・3・4・5・8・11が第3層（炭層）からの出土である。

溝19（第38図）

1～3は土師器の甕である。いずれも体部中位に最大径をもつ球形を呈し、口縁部は体部より「く」字状に外反する。1の口縁端部は水平な面をなし若干内側へ肥厚する。口縁部内外面には強いヨコナデを施し、体部外面はハケ調整、底部付近はナデ調整を行う。内面はヘラケズリを行い底部に指頭圧痕が残る。2の口縁端部は外傾する面をもち内方へ肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデ、外面は全面にハケ調整を行う。内面はヘラケズリ調整で底部には指頭圧痕が残る。外面に一部ススが付着する。3の口縁端部はやや内傾する面をもつ。体部外面は細かなハケ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ。内面はヘラケズリを行う。口縁部外面にスガが残る。4は1～3に較べて小ぶりの甕である。体部中位に最大径をもつ球形を呈し、口縁部はやや外傾しながら短くたちあがり、端部は薄く尖っておわる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整を行う。体部内面下半はヘラケズリ調整、上半は工具によるナデ調整、底部には指頭圧痕が残る。外面底部から体部にかけてスガが付着する。5、6は土師器高杯である。5の杯部は水平な体部から屈折して外上方に長くのびる口縁部を有する。脚部は、下方へやや広がる脚柱部から大きく屈折してほぼ水平にのびる裾部をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面はヘラケズリ内面はナデ調整、脚柱部外面はヘラミガキ内面はヘラナデ調整、裾部内外面はヨコナデ調整を施す。6は脚部のみ残存する。下方へ広がる脚柱から外方へゆるく屈折して短い裾部をなす。杯部内面はヘラミガキ、脚柱部外面はハケ調整のち上半部のみヘラミガキ、裾部内外面はヨコナデ調整を施す。7は土師器壺である。体部中位に最大径をもつ球形の体部を有し、口縁部は内湾しつつ外上方へ長くのびる。外面は全面に密なヨコ方向のヘラミガキ調整を施し、口縁部内面には放射状に粗くヘラミガキ調整を施す。体部内面上半及び底部に指頭圧痕が残るが、体部下半はナデ調整で滑らかに仕上げられている。胎土は精良、外面体部に黒斑がみられる。8～10は土師器の小型丸底壺である。8は底部が若干平らになりやや扁平な形態になっている。口縁部にかけて「く」字状に外反し、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面及び底部外面は細かなハケ調整、内面は体部から底部にかけてヘラケズリ調整。9は扁平な体部から「く」字状に外反する口縁部をもつ。端部は薄く尖っておわる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラ状工具によるナデ調整、胎土は砂粒を多

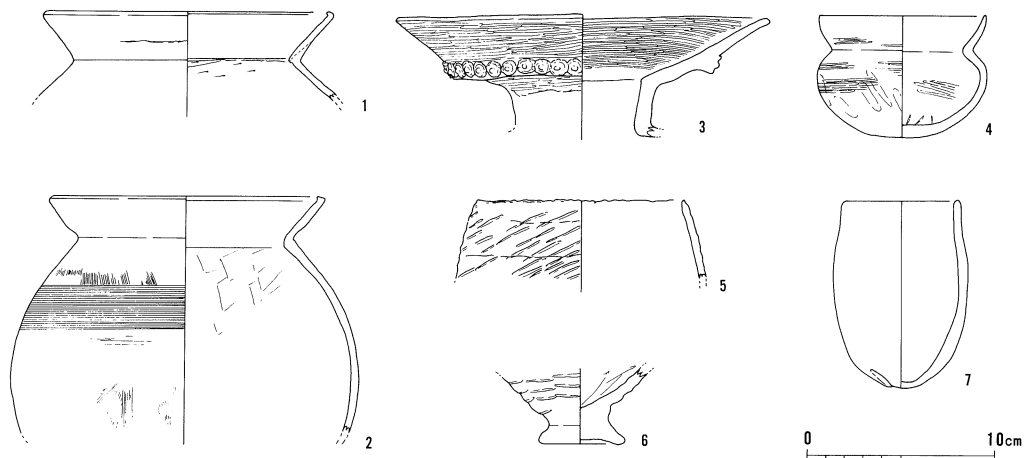


第38図 溝19 出土遺物

く含み、作りも粗雑である。10は最大径が体部上位にある肩の張った形態で、口縁部は「く」字状に外反してのび、端部は尖らせておわる。外面は口縁部から肩部にかけてハケ調整後ヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリのちナデ、内面は体部から底部までナデ調整を行う。外面体部に黒斑がみられる。11は二重口縁をもつ土師器壺である。球形の体部からやや外反する頸部がたちあがり、屈曲してさらに外反する口縁部がのびる。端部は外傾して面をもつ。外面は口縁部から頸部にかけてヘラミガキ、体部はハケ調整を施し、内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部をヘラケズリ調整する。

土器群 (第39図)

1・2は土師器甕である。1は口縁部のみの残存で、体部から「く」字に外反し端部は内側へ肥厚する。口縁部内・外面ともヨコナデ調整を行い、体部内面はヘラケズリを頸部内面にまで及ぼし鋭い稜をなす。器壁は薄く全体的にシャープに仕上がる。2は球形の体部から「く」字に外反する口縁部を有し、端部は内側へ肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は細かなハケ調整、内面はヘラケズリ調整を行う。ヘラケズリは屈曲部まで達さず頸部は明確な稜をなさない。器壁は薄く仕上がり胎土も密である。3は二重口縁をもつ壺である。体部以下を欠損する。頸部は体部から短かく立ちあがり、口縁部は大きく外反する。その中程に断面三角形の突帯を貼付し、突帯上には花形を思わせる刻みのはいった円形浮文を貼付する。口縁部内外面および頸部外面にヨコ方向のヘラミガキを密に施す。頸部と口縁部の境界に接合痕がみられる。4は肩の張った扁平な体部をもつ鉢である。体部より内湾気味に「く」字に外反する短い口縁部をもつ。器面の風化が激しいため調整は不明瞭だが、外面の口縁部から体部にかけては密なヘラミガキが施されていたとみられる。内面の一部に粗いヘラミガキ及び底部には工具痕が残る。5、6は製塩土器である。5は小片であるため口径、傾きともに不安が残る



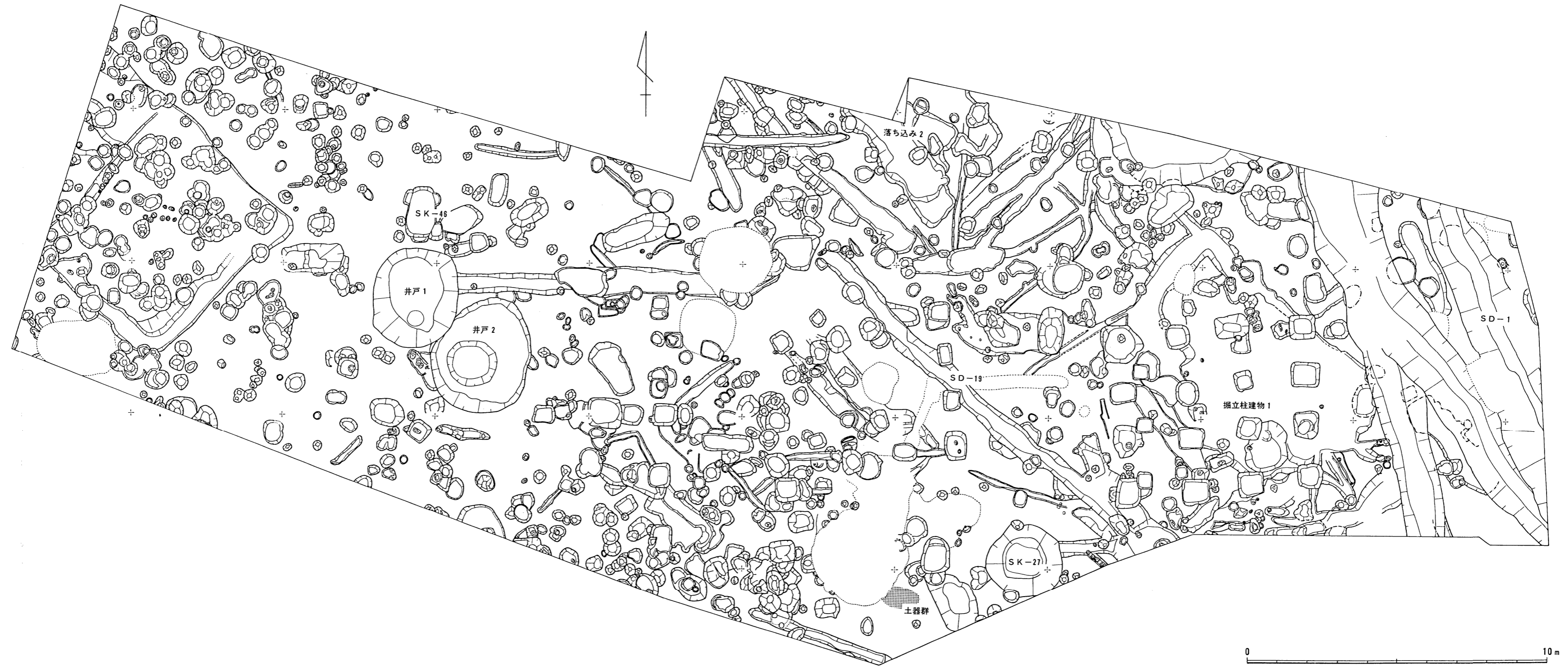
第39図 土器群出土遺物

第IV章 島田遺跡第6次調査の概要

が概ね図のように復元された。口径は10.8cmを測る。口縁部は内傾し端部はつまみ出すだけの粗雑な仕上げとなっている。外面はタタキ調整、内面はナデ調整を行う。器壁は薄いが胎土は3～4mm大の石英・長石粒を多く含み粗である。6は底部のみの残存で「ハ」字に短くのびる脚台をもつ。体部外面はタタキ調整、内面は工具によるナデ調整。胎土は5と同様である。7は口径約5.8cm、器高は9.8cmを測るタコ壺である。底部は丸底で、体部から口縁部にかけて垂直にたちあがり、端部は丸くおさめる。半分近く欠損しているため紐通しの孔の有無は不明である。器面は灰白色、断面は黒色を呈する。



第40図 土器群出土状態

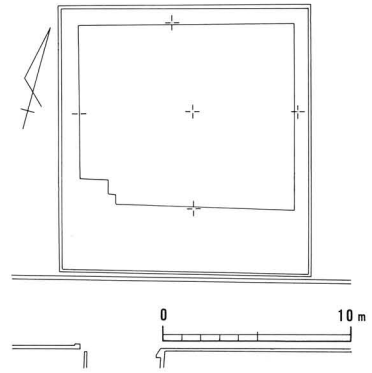


第41図 遺構全体図

第V章 蛭池北遺跡第14次調査の概要

1. 調査の経緯

豊中市蛭池北町2丁目43-5、43-17番地において、施主後藤昭寛氏から住宅の建替に伴う届出が平成元年5月1日付で提出された。当蛭池北町は埋蔵文化財包蔵地、蛭池北遺跡として周知されている。広義は池田市に広がる宮ノ前遺跡に包含される弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。既往の13次に及ぶ調査から、施主は居宅が遺跡包蔵地であることを認識しており、事前に連絡をいただき、発掘調査の打合せ等を進めてきた。このような経緯から、平成元年12月11日から12月22日までの期間、発掘調査を実施した。

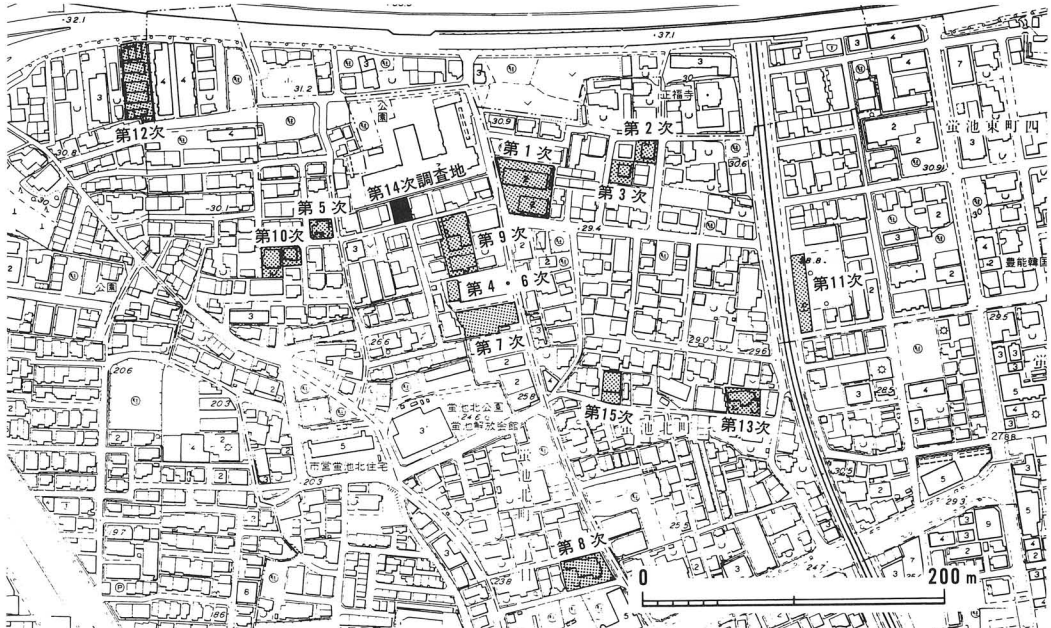


第42図 調査範囲図

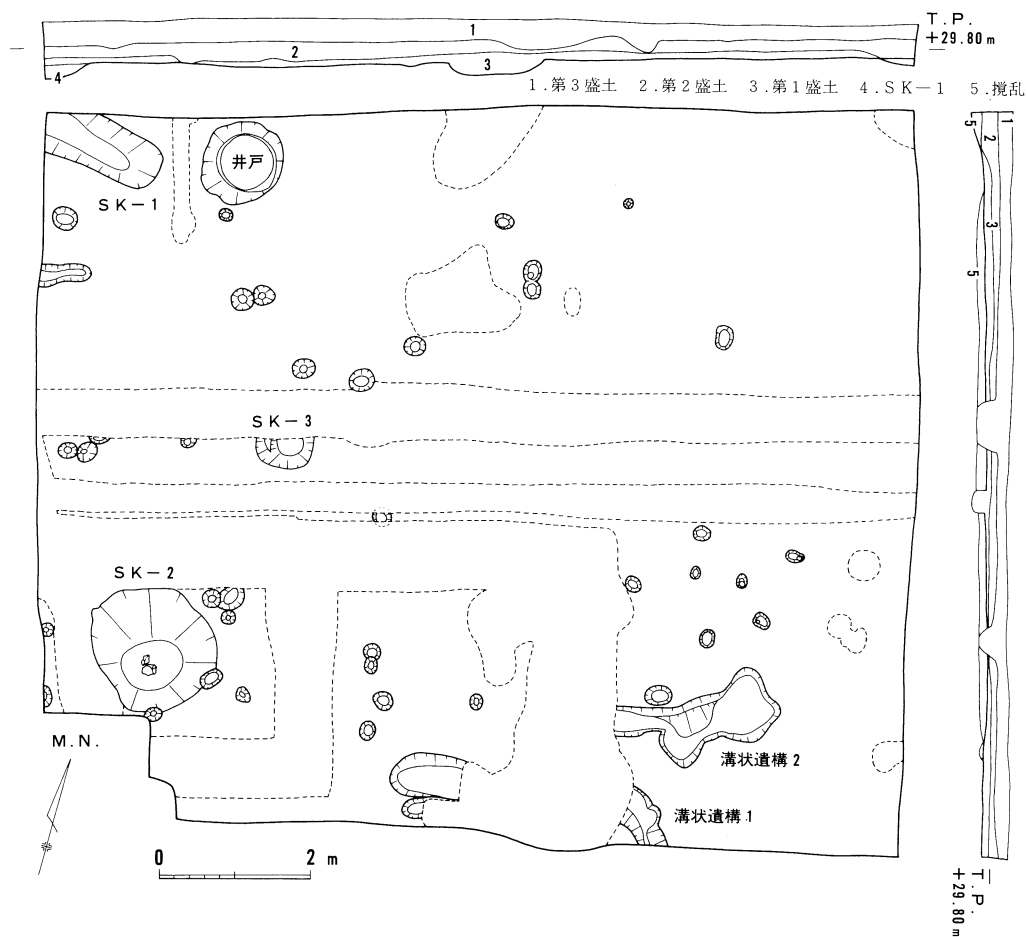
2. 調査の概要

検出した遺構は、井戸、土坑、溝状遺構、柱穴等である。

調査地における基本的な層序は地山面も含め後世に削除されていることが認められ、3段階



第43図 調査地点位置図



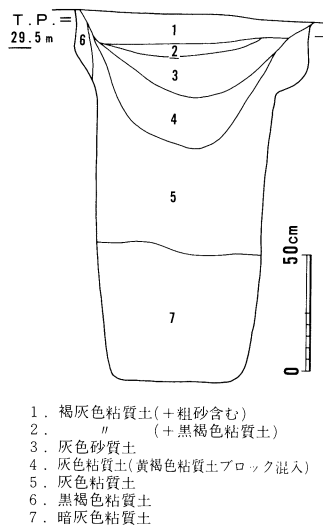
第44図 遺構平面図

の整地層が確認された。したがって、遺構はかなり削平を受け、そのうえ幾度かの住宅建築に伴って掘削され損壊している個所が多く残存状態は良好ではなかった。以上主要なものについて報告する。

(1) 検出した遺構・遺物

井戸 (第45図)

調査区の北側で検出した直径約1mの素掘りの遺構で、その形状から井戸とみられる。中位段丘の礫層を貫き、深さ1.7mまで達して粗砂層で止まっている。最上層で瓦器(第46図-1)が1片、最下層で須恵器片が1点出土しているだけなので時期は限定できないが、瓦器の出土から中世の遺構とみられる。

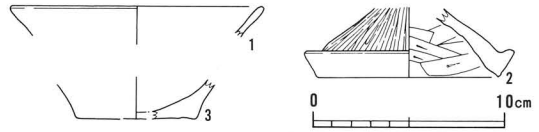


1. 褐灰色粘質土(+粗砂含む)
2. " (+黒褐色粘質土)
3. 灰色砂質土
4. 灰色粘質土(黄褐色粘質土ブロック混入)
5. 灰色粘質土
6. 黒褐色粘質土
7. 暗灰色粘質土

第45図 井戸断面図

SK-1

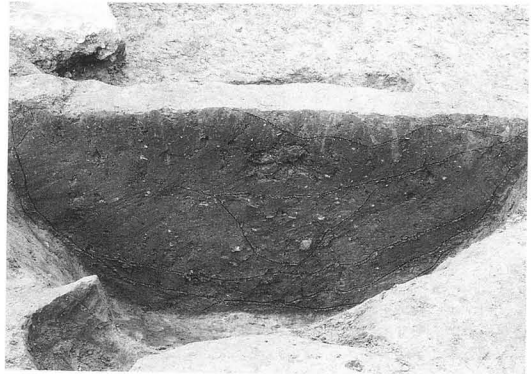
調査区の北西隅で検出した幅約0.7m、長さ1.7m以上の隅丸を呈する長方形の土坑である。西側が調査地外に続いたため、未確認である。深さは最も深い所で30cmで、東側に向かって緩く上がって一定していない。遺物の出土は1点もなく、時期は不明である。土墳墓として考えられるかどうかは疑問である。



第46図 出土遺物実測図

SK-2

調査区の南西隅で検出した直径約1.5m～1.7mの円形を呈する土坑である。深さは1.55mで摺鉢状の断面形態を有する。出土遺物は弥生時代中期の土器（第46図-2）が少



第47図 SK-2断面

しと、下層中央部で若干遊離した状態で、やや大きめの自然石が出土している。一面がいくぶんゆるく凹み、すり石状を呈している。

SK-3

調査区の中央西寄りで検出した直径0.75mの隅丸方形を呈する土坑である。北半分は後世の溝によって消滅している。深さは約0.3mでU字の形状をしている。出土遺物は少量の弥生中期の土器片（第46図-3）がみられる。

溝状遺構

調査区中央南端部分で2条検出した。溝状遺構2としたものは平面・断面形態から人為的な遺構とはみがたく、自然等の木株、根の可能性が高く省略する。溝状遺構1は西端部分で幅0.6m、深さ約0.1mを計る。中央部分は攪乱等により消滅しているが東側で南に曲がるコーナー部分を検出している。その幅は0.5mから0.35mと南側に向かって狭くなり、深さも0.15mから0.1mと浅くなる。出土遺物は皆無で時期は決めにくいが、平面形状から弥生時代の方形周溝墓の可能性が高いことが窺える。

柱穴

調査区全域にわたって散らばった状態で検出している。径は0.2m以下のものが大半で、深さも0.1m～0.2mと浅いものが多い。このことから脆弱な建物が想定されるが、攪乱等により現状では建てることができない。ただ磁北方向とそれに直行する東西方向に並ぶ数個の柱穴は推定される。これらの柱穴等からは弥生時代中期の土器片と須恵器が出土することから2時期の建物があつたことが認められる。

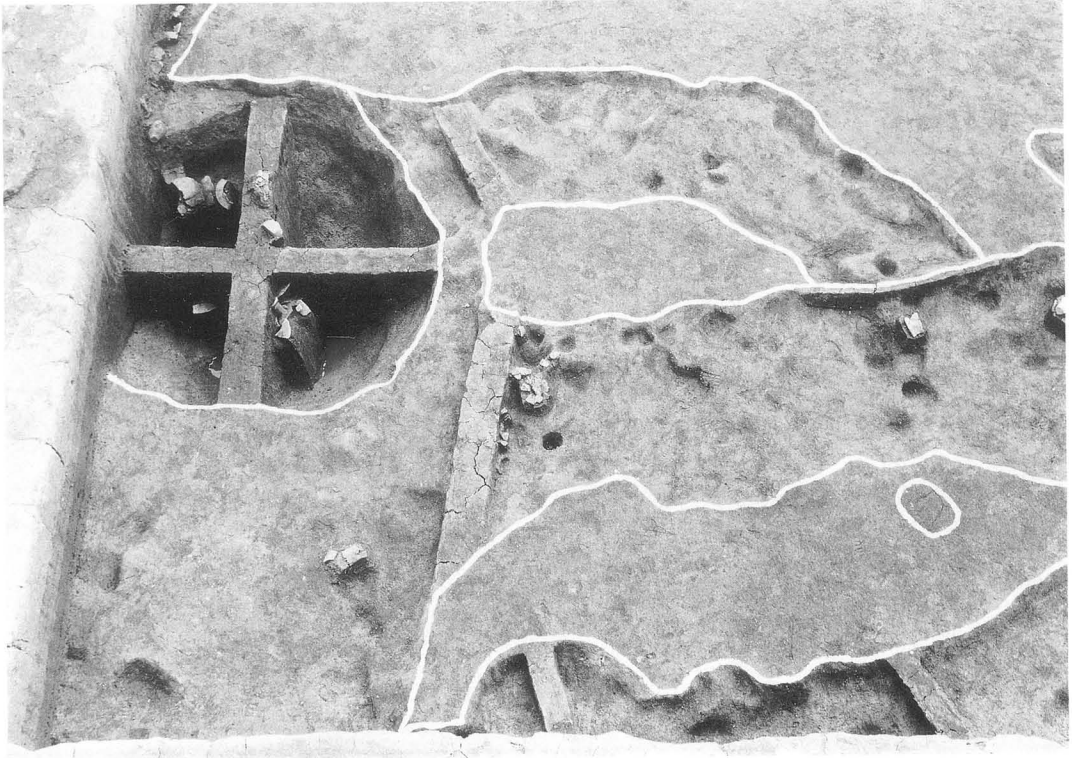
版 圖



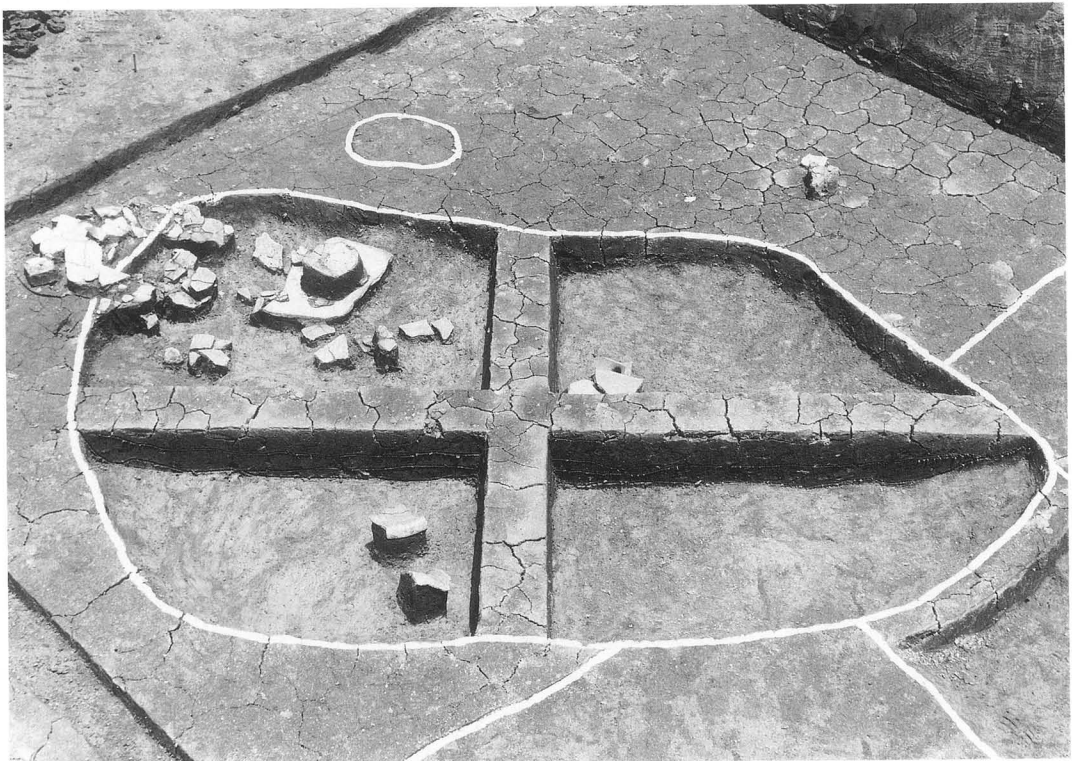
(1) 遺構検出状況（北より）



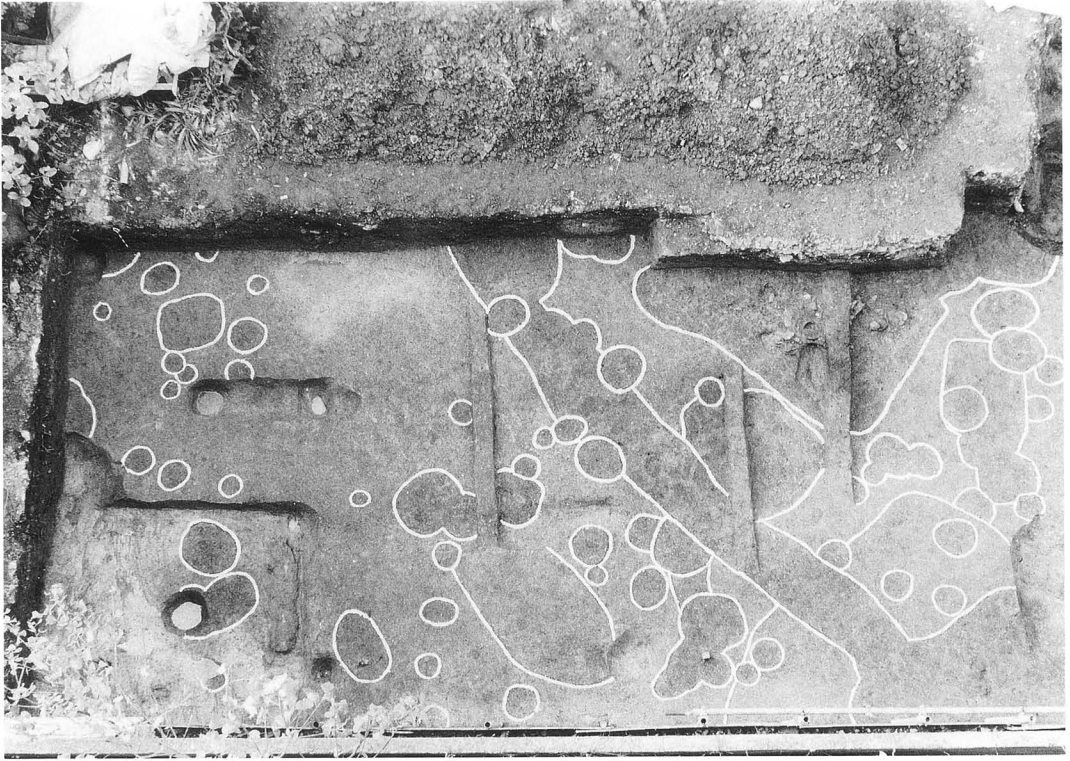
(2) 遺構完掘状況（北より）



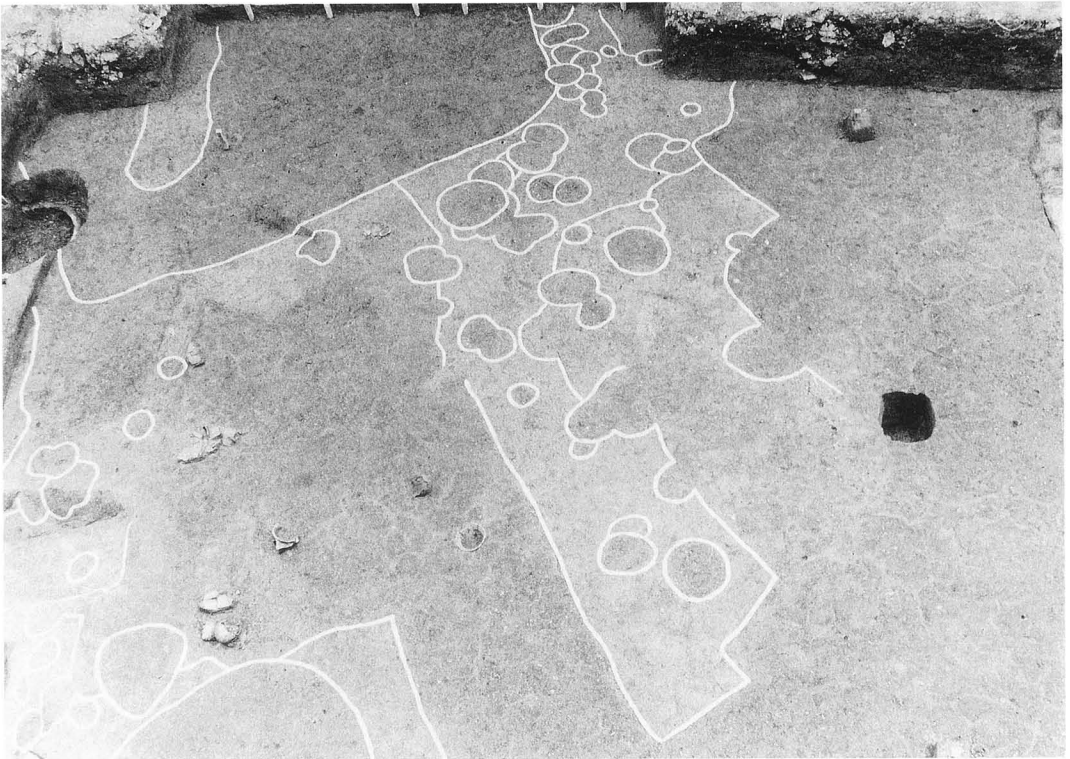
(1) SK-3 付近 (東より)



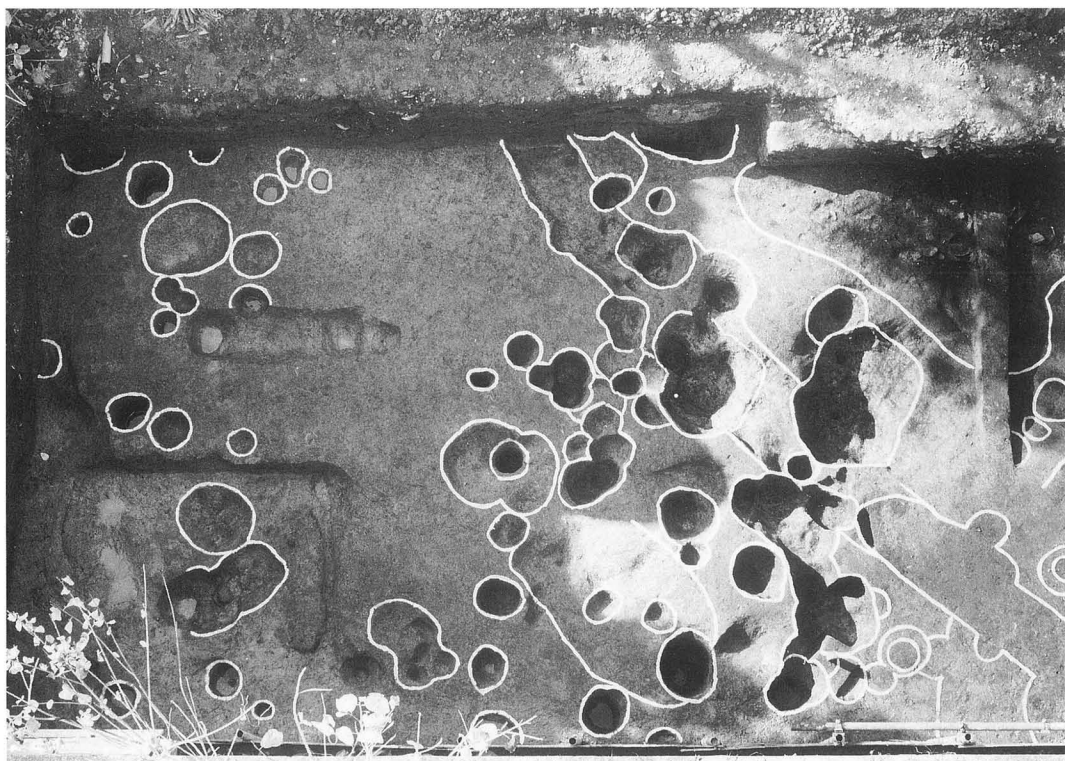
(2) SK-1 (南西より)



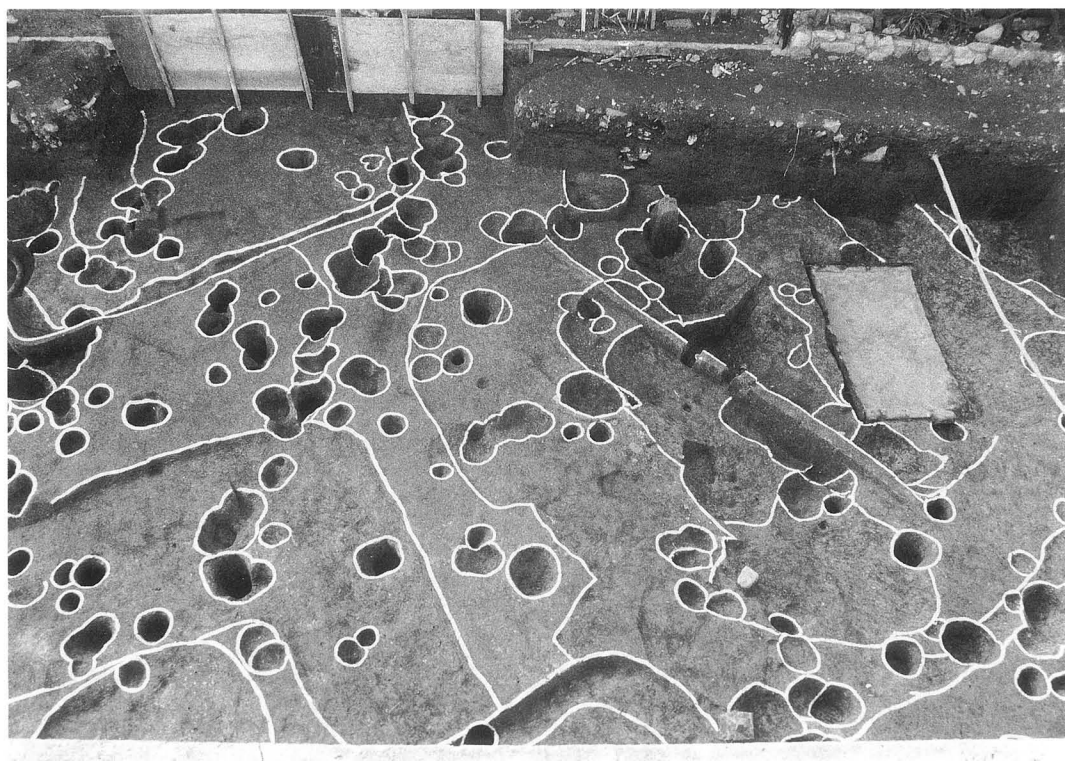
(1) 遺構検出状況 (南側)



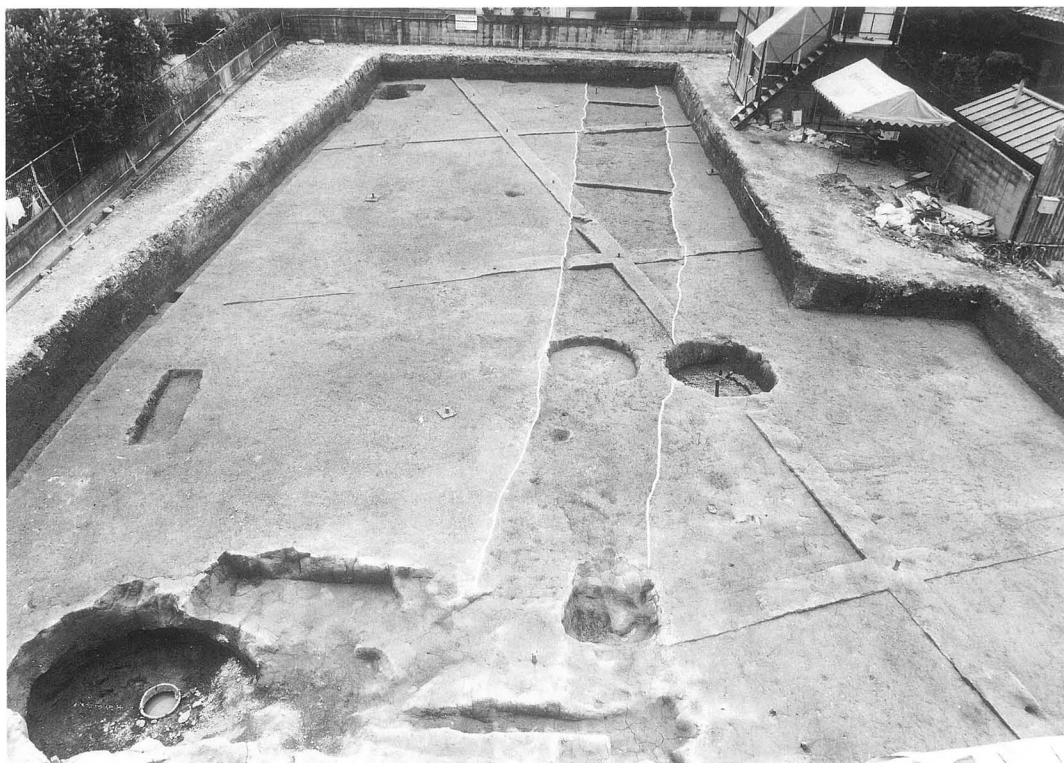
(2) 遺構検出状況 (北側)



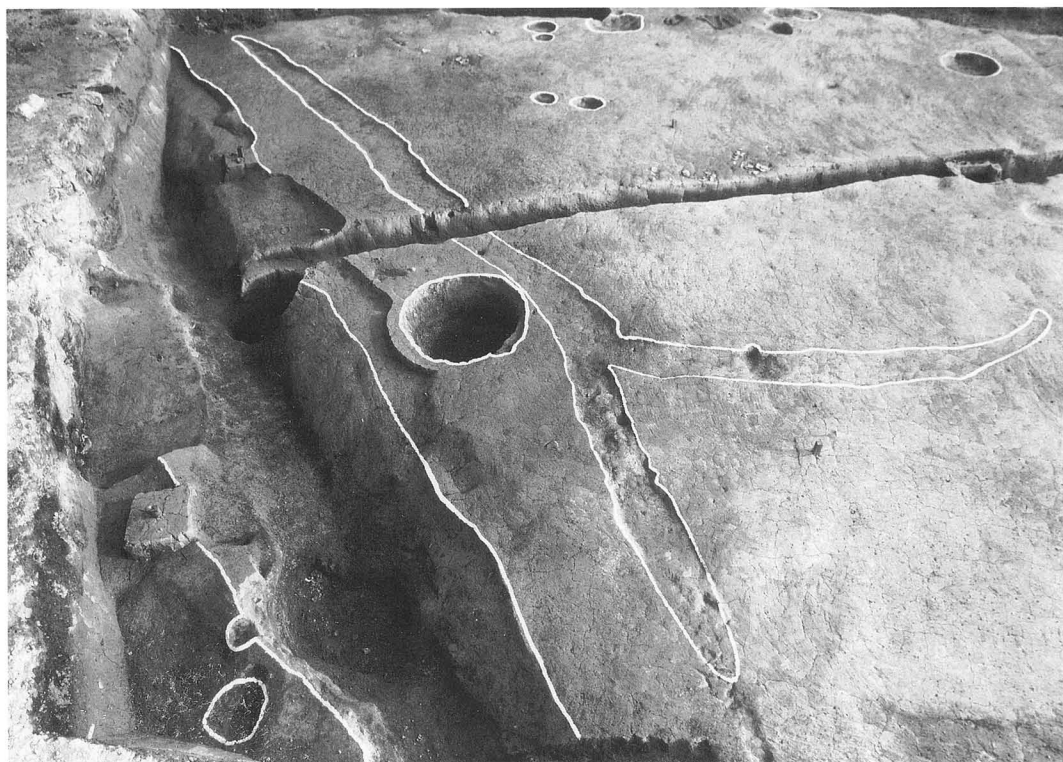
(1) 遺構完掘状況（南側）



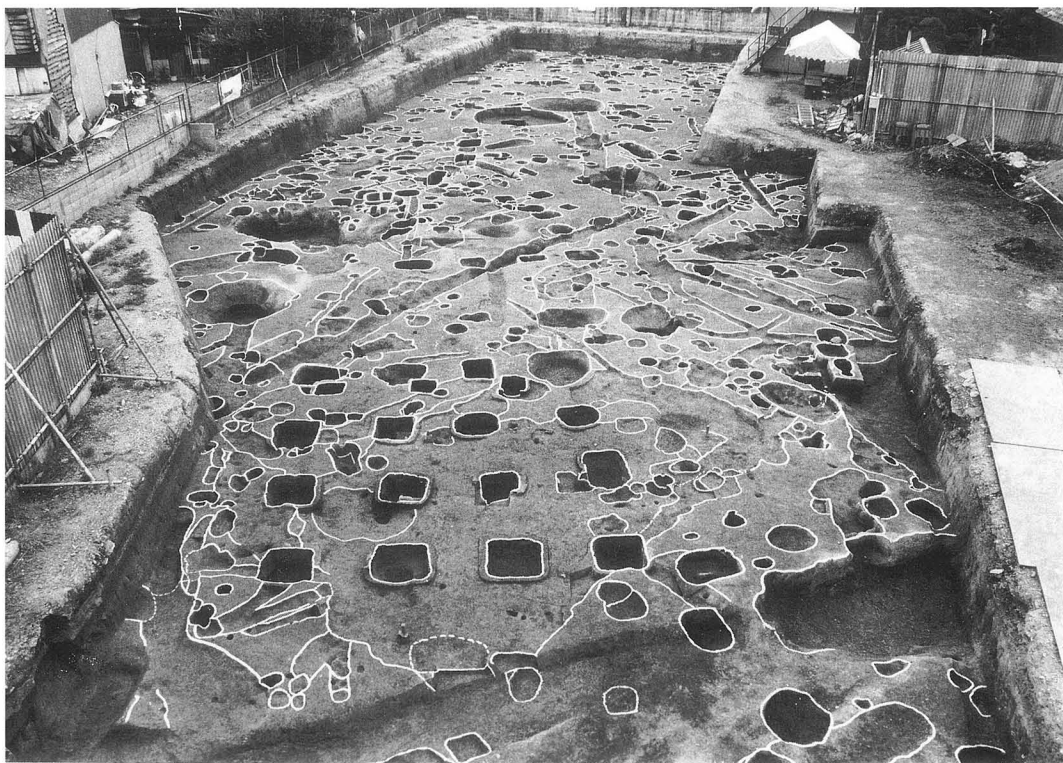
(2) 遺構完掘状況（北側）



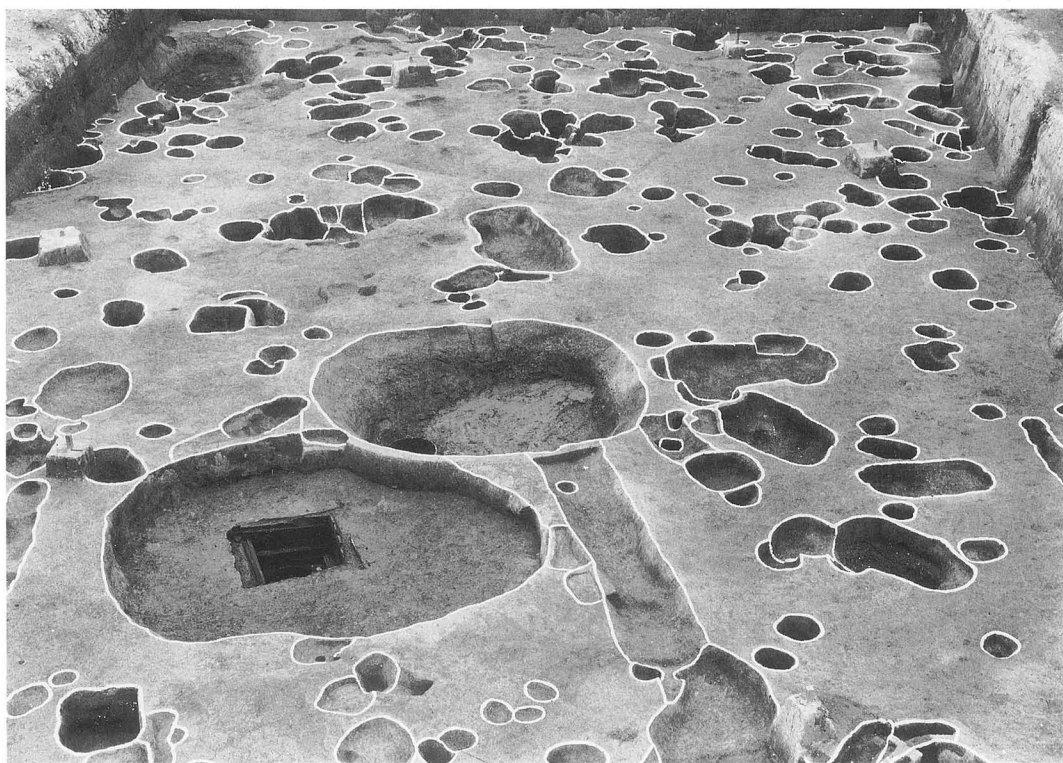
(1) 包含層上面検出状況（西側）



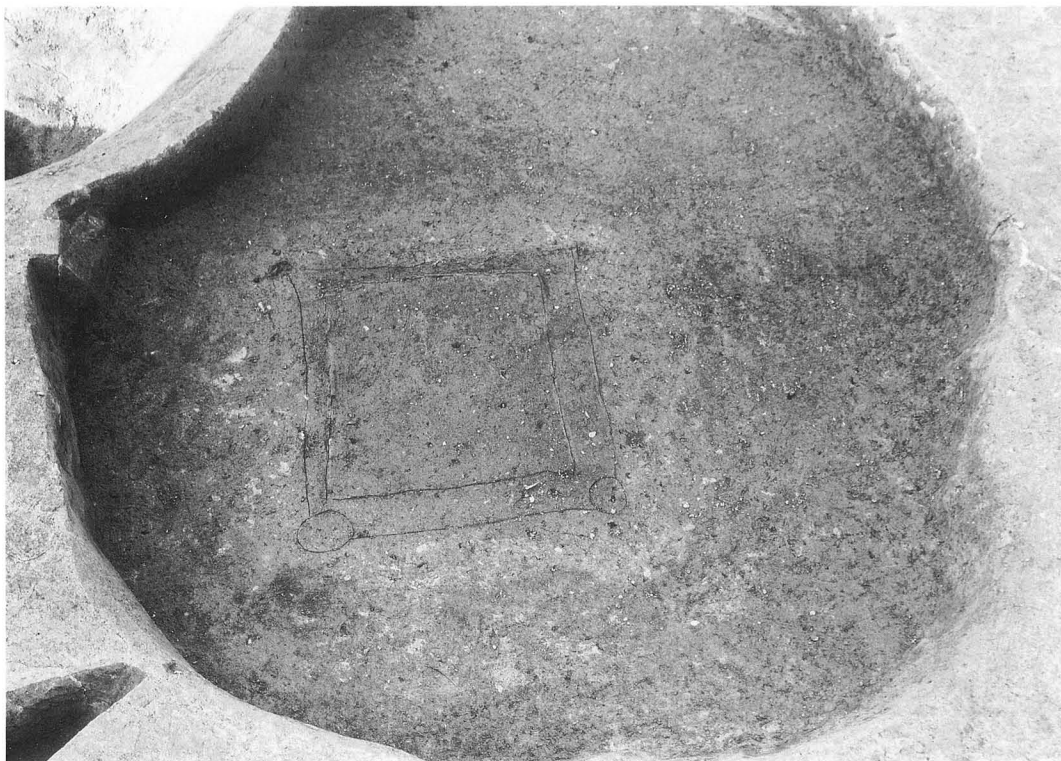
(2) 大溝検出状況



(1) 遺構検出状況 (全体、東から)



(2) 遺構検出状況 (西側)



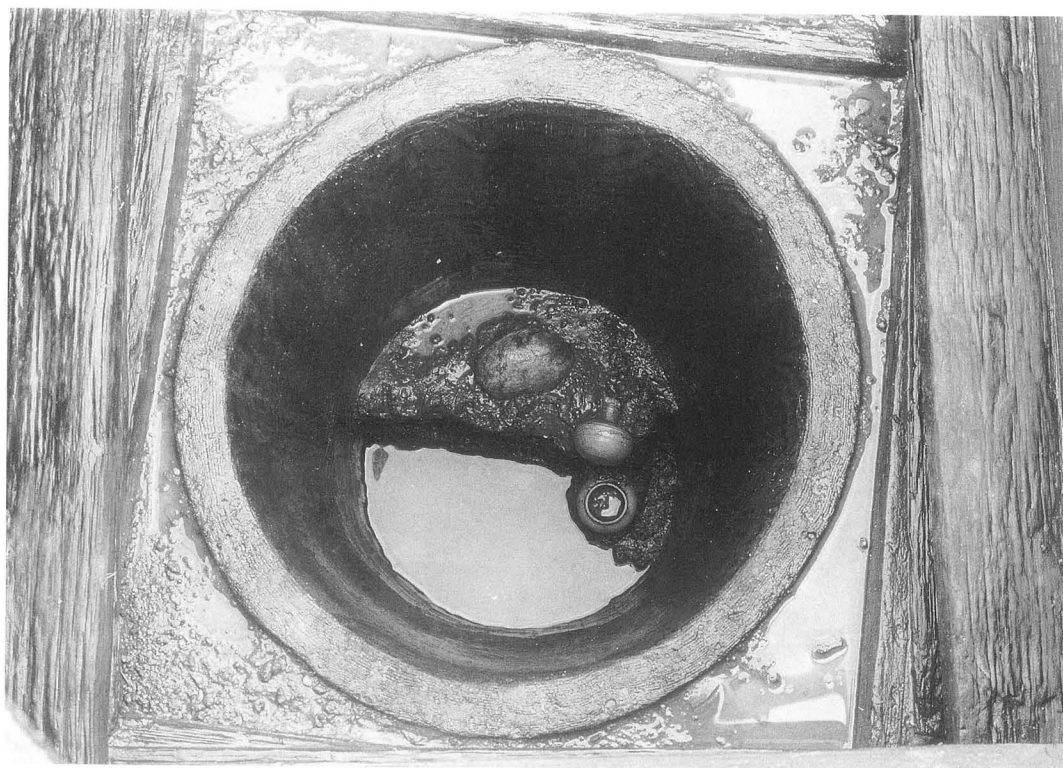
(1) 井戸 2 検出状況



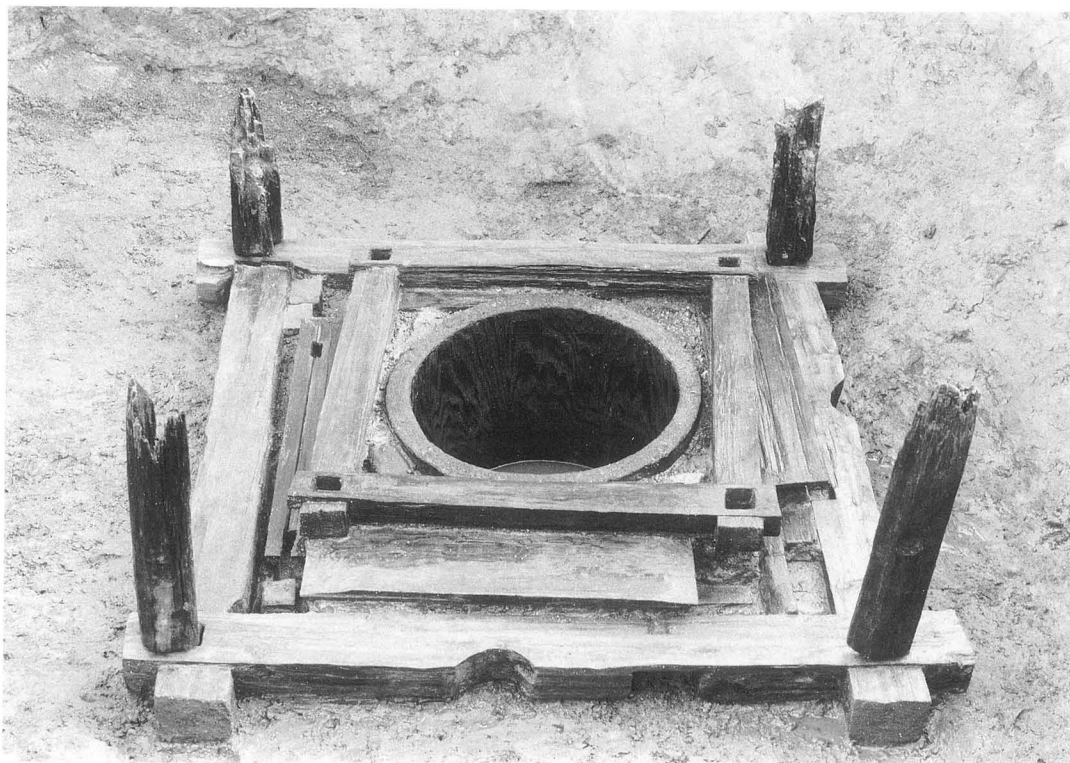
(2) 井戸 2 完掘状況



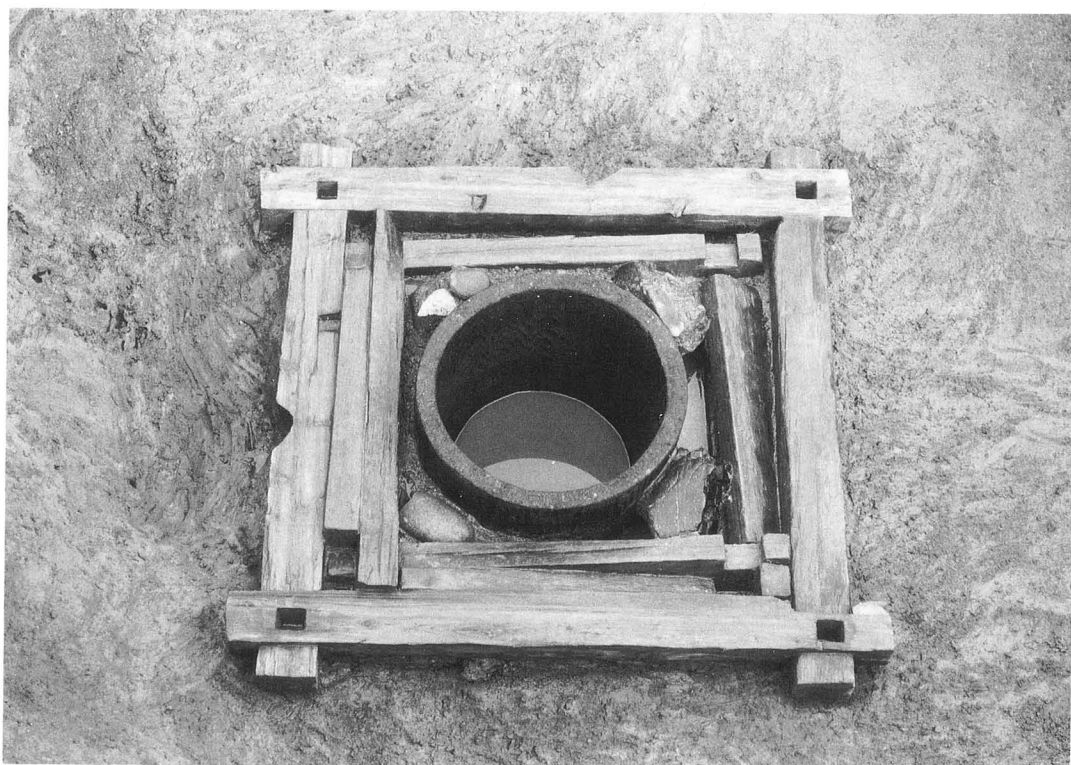
(1) 井戸2 外枠木組



(2) 井戸2 井筒内部



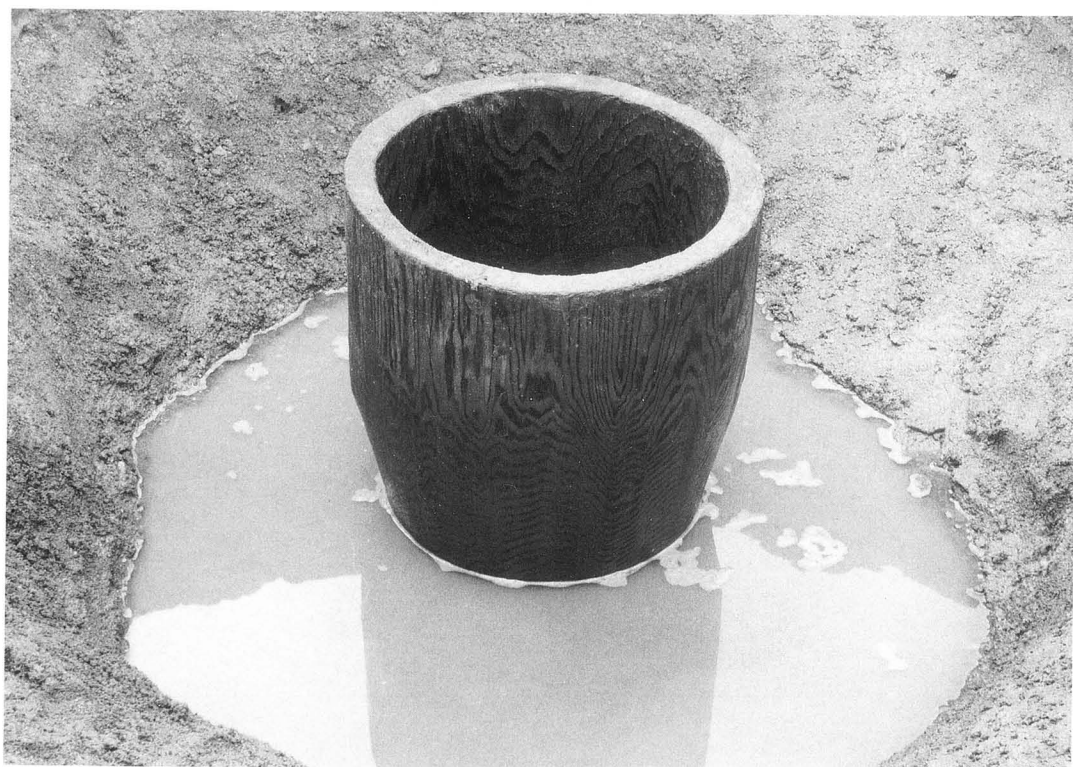
(1) 井戸 2 木組の状況 (上部構造)



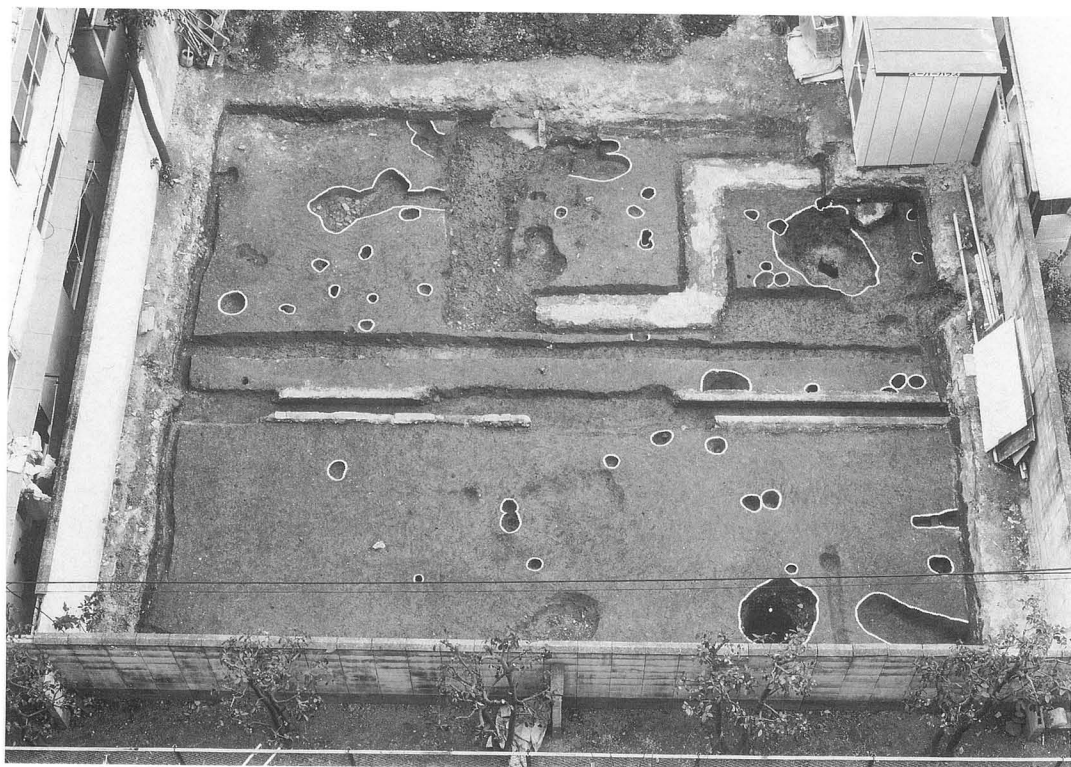
(2) 井戸 2 木組の状況 (上部構造土台)



(1) 井戸2 木組と井筒 (下部構造)



(2) 井戸2 井筒



(1) 遺構完掘状況（北から）



(2) 井戸完掘状況

豊中市文化財調査報告第28集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1990年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化係

印刷 やまかつ株式会社